始

36.12.25

1999

321
550

獨一本門乃大觀

324-560

獨一本門の大觀（種本脱迹の教義）

餘佛不造章第壹

目次

一、序文……一
一、小序……一
二、噫無相承なかの如き吾山……三
三、造不師系の色彩一斑……六
一、舒師は何故に不造なるや……一〇
一、蓮成、智傳、妙高、勇道の四院……一〇
一、貫師は何故に不造家なるや……一二
一、學究的爭論の緣起……一三
一、大聖釋尊は不造正意……一四

著者目録
寄贈本
大正 6.11.22 寄贈

一、日本の惠日大聖尊……一五
一、大導師興尊も不造……一七
一、目師と順師も不造……一八
一、尊師實錄の價値を知るべし……一九
一、日尊上人の不造主義……二一
一、絶待家の大法將……二四
一、要法寺か雜法寺か……二五
一、中興辰師は内鑑冷然……二六
一、二身俱失の要山三寶堂……三〇
一、祖像奉安は重復にあらず……三一
一、聖影造立餘佛不造とは何ぞや……三二
一、反本法的形骸の慘禍……三五
一、米搗八藏の觀心……三六
一、眷師法令を評す……三八

一、頑迷なる哉造讀論者……四〇
一、日眷日良地を易へは皆然かり……四二
一、造佛論者同士打の一例……四三

三寶一體章第貳

一、小序……四四
一、日蓮宗の三寶式……四七
一、日興門下の三寶式……四八
一、一體三寶の信念……四九
一、三大秘法則一大秘法……五〇
一、本尊式ありて三寶式なし……五一
一、後世私に義を立てゝ……五二
一、壽量品に現はれたる明文……五三
一、新堂を開山堂と改奠せよ……五四

一、聲ばかり大なる統合問題……五四
一、佛寶中心の三寶……五五
一、道則孔子孔子則道……五七
一、三寶の別說は佛陀の禁戒……五八
一、法は藥物佛は醫師……五九
一、要山客殿の法式は非なり……六〇
一、大義名分の沒却……六一

下種本尊章第參

一、小序……六五
一、種本脫迹の敎義……六七
一、一百六個之を註ず……六八
一、文上文底とは何ぞや……七〇
一、雖脫在現具騰本種とは……七一

一、萬代不易の銅標を樹て……七二
一、諸山惣代妙覺寺日琮……七三
一、拾五山の犬……僧寶洲……七四
一、要山佛像撤廢の時代……七五
一、本因妙と本果妙……七六
一、絕待妙と相待妙……八一
一、尊門の維新を斷行……八〇
一、諫曉八幡鈔の內容……八二
一、敎機時國鈔の內容……八三
一、種佛脫佛の五大異目……八五
一、刹那成道と歷劫成道……八八
一、三世印判日蓮體具……九〇
一、歷代の嗣法悉く日蓮……九一
一、出尊形佛とは何ぞや……九二

一、鎌倉時代各宗共通の教義……九三
一、因縁感應の大事……九五
一、日本の大釋迦……九六
一、本因妙の教主と地涌の菩薩……九九
一、主義を標榜せる要法寺……九九
一、惣體の地涌と別体の地涌……一〇〇
一、初心成佛鈔の秘文……一〇一
一、釋迦上行一體の説……一〇二
一、何り以日蓮爲本尊の聖訓なきや……一〇六
一、信眼映徹する時……一〇八
一、百川の海に潮するか如し……一〇九
一、理證論よりは現證論……一一〇
一、造佛論の代表者……一一二
一、良師法令評論の評論……一一六

序

宗旨の改革を根底とせざる宗門改革はまさに空中の樓閣である看る〳〵内に烟散霧消して仕舞ふそんな蜃氣樓の樣な革新はなくともがなである、今時なくてならぬものは天才的偉人である、鴻業を創むる豫言者である、發願ある求道者である、頑迷なる宗教家、魯鈍なる陣笠連中の暗中飛躍などは眞平御免である、すべての改革に向て宣言す、先づ汝の第一歩から出直して來れと、三十二相の幻影に眼をくらまし、無作三身の本佛を忘れたる此子可愍、爲毒所中……あゝ化裝の影は日を追ふて剝落するも、實質の光は時を追ふて輝やきを增すのである、

三界の主、一切衆生の父、別しては日本國の柱たる日蓮大聖人、それは徹根徹底したる、唯一絶對の聖境である……世界統一の要法たる三大秘法總在事の一念三千の妙法曼陀羅は、徹頭徹尾本尊の圖顯である……人法は一如である、教觀も一如である而して信智も亦た一如でなくてはならぬ、徹上徹下宗祖中心の主義

である……草山妙子歌ふて云はく鹿苑三乘は空裡の華……鷲峯の一實は水中の月別に風光の無邊を照す有り……塵點劫來曾て滅せずと味ふべき哉である、詩を學ぶものは仙を學ぶが如く時至て骨自から換はる、羅漢の諸漏既に盡くるや頭髮自然に落つると云ふ、適なる哉時なる哉、それ適聖を適處に奉安し、敢て或は輕賤すること莫れ、適材を適處に置き時措の宜しきを失ふこと有ること勿れ、何爲れぞ栖々徨々として、適時の本尊を信じ、適時の修行を企て、適切なる信念を樹立せないか、換骨脫胎の時は到れり、偶像碎破の機は逼まつて居るに、何時まで聖胎長養の美名の下に惰眠を續けんとするので有るか、

經に云く魔王野狐鳴して獅子吼と云ふが如し、色は相似たりとも獅子に非ず、魔王よ汝ち比丘像を示すと雖も汝の說く所比丘の說に非ずと、今や山南山北雄狐綏々として徘徊し、狐鳴四方に喧傳せり、須らく千鈞の喝棒を揮ふべき時でないか、時務を知る者は俊傑の徒である、深山何處にか臥龍蟠まる、大澤何の邊にか鳳雛潛めるや、善財童子は眠り正さに酣なり、常啼菩薩は嬉々として笑ふて居る、此時に當りて獅子吼一番なかるべけんや、旗鼓堂々、陣容整々と彼の羊質にして虎皮を被むれる、蠢々乎たる殘骸佛敎の根絕を計らずして、何時まで不鮮明なる保護色の下に曖昧摸稜、胡蘆を畫かんとするのであるか早く本時の性に復へり、無生の曲を奏し、不死の歌を謠はないか、從來眞是安、今日安皆眞である、

休めよ脫迹敎の範疇に沒頭することを、迷中の是非は是非共に非である、悟上の是非は是非ともに是である、如今悟了す宗門の事、法をして人を追はしめよ、努々人をして法を逐はしむること莫れだ解せりや……

維時大正四年三月十八日

適々庵主人識

獨一本門の大觀（一名種本脱迹の教義）

大僧都　安良日將述

餘佛不造章第一

本地上行の院、住本顯本の寺、要法受持の一大本山其嗣法の上人たるや五十一代を數ふ、開山滅後實に五百七十一年一水瀉瓶の相承あり先聖後聖其揆一なり、何をか同揆にして一轍と云ふや、曰く宗定本尊は遠く文永九年の春以來、符法の沙門日興上人を對告として既に奠定せられたり、事理俱密の大曼陀羅尊是なり、彼の佛像の立不等に至りては諸山開祖の意志によりて設くる所、要するに擬宜誘引の手段と云ふべし、其尊像たるや本尊體具の佛菩薩なれば、造不共に日蓮本宗の法理には違はざるか、然りと雖も前賢の化儀的學見に對して滿腔の敬意を表し、左記三章を設け衲が領解の一端を開陳し敢て瀨嶋日濟上人の指教を請益せんと欲す附記す大正四年二月十八日の諭示に本末教師へ諮問とありしが諮問の二字甚だ

不穩にあらずや、宜しく試問と訂正せざるべからず、然らずんば吾山の師資知識相承を奈何せん噫、

吾が高祖門下の正本尊たるや曼陀羅尊なること皎として白日の如し、誰れか又異議を構へんや、然れども各自の戒壇に於て尊像を安くこと、暫く衆を誘はんが爲に設くる所なり、凡人の常情として金色尊嚴の影像を拜するとき、自然に渴仰の心を生ずるが故なり、方便假設の木像に耽溺して人法の正本尊を信ぜざらんか之れ枝葉に攀附し根幹を尋ねず波瀾を弄んで淵源を窮めざる者なり、元意を捨て細科を取り駿逸を畧して玄黃を見るが如し、何に由りてか己心の佛性を解せんや、彼の强て造佛を迫まるが如きは誠に淺學未練の管見と謂ふべきなり、聖の御在世偶々造立の人あれば、其深信宿福を讃するの聖言往々なきにしもあらざれども、此は須らく採擇して宜しく善斷せざるべからざる者あり知らずんば有るべからず、それ大聖衰世に現はれ化を垂れ玉ふ先づ廢權立實を主とせざるべからず、蓋し宗門創草の時代亦た止むを得ざる者あり、されば聊かにても法華有緣の者を見ては所謂功の疑はしきは重きに從ふの格にて盛んに造像の功德を褒賞すと雖もみな是れ信者の信念を向上せしめんが爲の弄引なり、唱法華題目抄、日眼女抄、骨目抄、眞間抄、四菩薩抄、これ等は造像讃嘆の優なる者なり、斯の如くにして最後に正境寶殿を瞻仰し、成就佛身を期せしめんとは是れ聖祖大悲の善巧か凡慮の測る所に非ざるなり、濟師の諭示に云はく覆藏なく意見を開陳せよと、されば此編は聊か危言激論に涉るを免がれず讀者之を諒せよ、縷々數萬言他山の石あり藥石の言あり讀者の玉を磨き膏肓に鍼するの資料たるとを得ば眞に望外の幸なり、

◎噫無相承なるかの如き吾山

試に要山歷代の嗣法を見よ

蓮興、目尊の四聖五代日尹五代日大六代日圓六代日源七代日從七代日元八代日得八代日長九代日禪九代日嚴十代日廣十代日遵十一代日法十二代日在十三代日辰○四十五代日濟……此の如きは是れ一山に二主を承認する者なり、禍源たらざるを得んや、天文十七年併合の際何ぞ五世日尹六世日大乃至十

九代日辰と改めざるや是れ千歳の恨事と云ふべし曰はく本佛論曰はく二尊說曰はく一尊主義等何れも侃諤の論鋒を交へし者その濫觴は此に存するか十如是の中に相如是が第一の大事なれば佛は世に出でさせ玉ふとは是なり宗祖曰くたとひ善たりとも先づ名を忌むべしと必乎正名を主義とせる本化門下に於てかゝる非名分の事相を默過せし先賢も亦た多大の責ありと云ふべし、傳に云はく上行院系は不造にして住本寺系は造像なりと之れ或は然らん、關東の諸山は大抵不造主義にして關西の本寺末刹概して造立木繪を實行せり吾人之を會通して云はん、一山二主の駢立これ禍の根本なるか如しと雖も或はかゝる事相不同の中にも一點靈犀の通ずる者ありて、大法理の異塗同歸なることを覺知せしめんとの善巧方便なるなからんやと、論者あり否然らずと云はんか是に於てか予は要法寺の無血脈を絶叫せざらんと欲するも豈にそれ得べけんや、

本朝建武中興の往時南北兩朝の併立するもの五十年間にして漸く融合統一の王者現はる南朝後龜山天皇是なり天皇は北朝の後小松天皇に父子の禮を以て神器を傳授せり南朝の正統既に業に明かなり何事ぞ明治の晩年に至りて南北正潤なしと論する官僚的曲學阿世の博士あり天下の蒼生を誤らんとす、或は北朝正統論を唱ふる危險人物さへ輩出し、帝國議會に於て奇怪千萬にも南北正潤論てふ大活劇を演ぜしことあり然れども明治天皇の大英斷は、五百年來の迷想を一洗して南朝正統と確定せられ同時に北朝の光嚴、光明、崇光、後光嚴、後圓融、後崇光、の六帝は歷代天皇の尊號を撤去せられたり、大義名分の冒瀆すべからざる洵に此の如きものあり、吾人は要山嗣法世代良師の聖斷に感泣せざるべからずと是に於てか亦た謂ふ嗚呼神器の存する所は正統の存する所なり、神孫皇子と雖も又如何ともすること能はざるか、それ日尹上人は開山尊師の補處にあらずや、日大師の如きは所謂別に門戸を構へしものなり延山離去の門祖上人と日を同ふして語るべからざるや智者を俟つて後ち知らざるなり大義名分論此に於てか起るなからんや、吾人は造不正潤論、讀不邪正論等を喚起するの悲しむべきを知るが故に暫く言を盡さずと雖も時の一字……は早晩之を解決すべしと確信して疑はず

◎造不兩系の色彩一斑

尹圓從得禪廣嚴證……以上八師不造宗

大源元長法在……以上六師造像宗

十三代辰師……は聖誕二百八十七年永正五年に生まれ天文十七年四十歳の時上行住本の兩寺を併合し要法寺と改稱後三年にして伽藍を建立す中興の稱是より起るか記せよ要法寺改稱の後十有七年永祿七年八月十六日十六山法理一統の盟約を成せしは辰師五十七歳の時なり、而して天正四年十二月六十九歳にして遷化せり一代の編著を拜すれば辰師の内證不造宗なること明白なり

十四代調師……辰師の高足なり辰師滅後十二年則ち天正十五年五月大石寺十四代主師と兩寺一寺の誓約をなし世出世共に相違あるまじと御本尊の交換をなせり現に要山法庫に存す是れ豈に無意義の外交的辭令ならんや大石十五代昌師より二十三代啓師に至る九代の貫主は吾山より晋山せらる之れ吾山の光榮と云ふべし想ひ此に至るとき誰れか今昔の感なからんや調師の不造宗なることは事實なり

十五代性師……不造宗なり其の自畫賛に云はく富士山林是祖風と果然富士五山及房豆諸山も共に祖風の顯彰か宗祖本佛餘佛不造の實現ならばなり

十六代堯師……不造宗……十七代恩師十八代陽師十九代成師廿代遙師も不造宗廿一代體師の宗旨名目鈔一名當家名目鈔を見よ八幡抄及時國抄に依て種本脱迹を明瞭に説けり不造宗なる事推して知べし廿二代祐師廿三代詮師も不造系統たるべし兩寺一寺の時代なれば假令如何なる著述ありと雖右の如く斷案せざるを得ず

二十四代饒師……姓を痴山と云ふ造佛の鼓吹者なり

二十五代舒師……百六箇對見記の著あり造像論あり

二十六代眷師……享保六年法令を發布し造像鼓吹す
二十七代奠師……鮮明なる不造主義を唱導す
二十八代全師……寶暦年中權迹の佛像全部を法藏へ奉納し其主義主張を實現せり
二十九代慈師……不造論の鼓吹者なり
三十代良師……本堂再建宗祖五百遠忌を修行し空前の盛儀を極む新たに法令を發布し餘佛不造貳品讀誦の規矩を爲す中興辰師と肩を併ぶべし
三十一代住師……百圍論、本尊决疑論、の著あり不惜身命の不造論者京都十六山中の一大權威なりき
三十三代勝師……鮮明なる不造論者
三十四代賜師……不鮮明なる造佛論者なり要法門下得意抄を見よ、現今の新堂を建立し文祿年中賜師時代の彫刻と稱する二尊四士四天二明王を安置せり
三十五代庸師……不鮮明なる造像論
三十六代惠師……不鮮明なる不造論
三十七代愿師……不鮮明なる不造論
三十八代生師……猛烈なる不造論者なり、日蓮主義者最後の國家諫曉を實行し生身佛と崇敬せらる
三十九代進師……不造論者なり前代に撤回せられし佛像又經藏より現はれ玉ふと云ふ呵々
四十代貫師……不造論者と斷ぜざるべからず
四十一代周師……不造論者
四十二代守師……本因妙時は宗祖本佛本果妙時は釋尊本佛等の說あり巡狩蒙塵の後は猛烈なる造像論を宣傳せり
四十三代珠師……不鮮明なる造佛主義か
四十四代海師……人法體一宗祖本佛論の鼓吹七拾年間終始一貫せり近世不造論者の巨擘なり

四十五代濟師……不鮮明なる不造家か造書不異論者か

◎舒師は何故に不造

正意なるや對見記、本因妙二十四番勝劣の下に、元初の自受用報身とは本因名字卽、童形の釋迦佛の悟なり、本有の儘を悟出す之れ則ち本有無作三身卽一の自受用身である、本有無作の故に迹中の人師の釋、なぜに之れなきは當然であると記せり、其内鑑の邊察すへきなり舒師又云はく、當流人本尊とは本地自受用報身なり之れは常修常證、常滿常顯、本因本果の主、なる故に在世脫益の應身等を以て本尊となすにあらず、是は元意至極の人に約する本尊であると……さては舒師の内證も亦た推知すべからざらんや

◎蓮成、智傳、妙高、勇道の四院

蓮成院は小栗檀林の伴頭賢承師なり晩に化主と尊稱せらる浪華蓮興寺歷代なり良師の徒弟なりしが後に勝師の弟子たり信受院化主と唱へし勝師とは其行學伯仲の間にあるもの、如し、此蓮成院師は大々的造像論者にして終始當年の嗣法上人勝師に對して挑戰せし教豪なり委細の評論は篇末を見よ

智傳院とは三十八代生師の高足なり才華煥發學識又淺からず最も宗教政策に通曉せり發明尊門義と金山抄とは其信仰の全部なり吾山造佛論者として近代の猛者なり晩に北山本門寺に瑞世せしが其所論を實現するに至らずして遷化せしは悼惜すべきなり、

妙高院、とは進貫兩師の時異流異安心を以て目せられたれども博學宏才宗門無比と稱せらる其筆鋒鋭利當時何人も當る可からす明治年間本山久遠寺に住職し退隱の後要山貫首珠師の招請に依り學林講師たるもの數年既にして要山嗣法四十四世を紹繼す學德一世に高く化導天下に遍し七十年間宗祖本佛論の唱導に勤む安政年間生師の諫曉に隨行備さに辛酸を嘗め來る信念の强固、人格の高邁、眞に吾山四聖三賢に肩を駢ぶと云ふべし

勇道院、とは四十代貫師の高弟なり山城阿闍梨の稱呼は又當年の權威なりき才學

識の三俱に高く一時言論の雄たり求道の念最も熱く五十年の生涯を石山攻撃と造佛主義の爲に捧ぐ燒頭爛額の苦衷に至つては誰れか畏敬せさらんや晩年興門正議七卷を起草せり尊門と云はずして興門を標榜す又一大識見と云ふへし然れとも道路相傳ふる所によれば兩卷の傳法書に對して大々的不敬の語を漏らせりと云ふ噫其終りを全ふせざる固より其所が悲哉

◎貫師は何故に不造家

と斷ずるや曰はく、去明治十四年頃六百遠諱の際本末緇素一般へ配布せられし天拜及本尊回向文は明治年間に於ける貫師法令とも謂つべし文云久遠元初自受用報身の尊形主師親三德有緣深厚、本因妙の教主南無日蓮大聖人云云之れ豈に宗祖本佛人本尊の觀心を告白するものにあらずして何ぞや、次に師は三妙院生師との親交あり行學亦た傳受する所多かりし而して當時妙高院智傳院の筆戰寧日なし貫師の胸中亦た諒すべき者あり貫師曾て日生上人の韻に和して云はく萬里遙かに傳ふ一封の文、君が教誨を思ふば面たり聞くが如し、奥州の月は是れ京華の月、吾が家的的の眞活機、老師從來悉く貫通、と亦た以て生貫二師の心意相通を知るに足らずや何物の痴漢ぞ貫師を造佛者流と誣ゆる予は此に其寃を雪がずんばあらず

要山

◎學究的爭論の緣起

は大畧此の如し今予は生師の曾孫弟にして玉野志師の孫弟釋日就の徒弟なり回顧すれば廿五年前予が教學指導の恩師智成準上人は血脈抄及本尊决疑論志霑問答抄等を寫本せしむ今や此編中に於て吾が恩師の師範たる志師に一擊を加へざるべからざるに到るあゝ乞ふ在天の英靈よ同歸寂光の朝たまで常與師俱生の夕べ迄不孝の科を許させ玉へ……師弟相爭ひ能所互に反目し傳法の宗主は更迭ことに法戰教鬪殆んど寧日なきものゝ如し恰かも保元平治の戰亂に父子兄弟互に殘害せしが如き慘風悲雨綿々として今に絶へず斯れ之を瀉瓶の相承と云ふべきや思ふて此に

至れば誰れか昊天を仰で先賢を怨慕せざる者やある、然りと雖退て深省すれば之れ亦た焉んぞ吾人後生の爲に止暇斷眠行學奬勵の地を與へんとの善巧ならざるを知らん是に於てか吾等は四聖一貫の大道坦々として砥の如き者あれば之れに向つて驀進せざるべからず法勳赫々相承嫡々たる吾が尊門豈に無血脈無相承にして可ならんや

◎大聖釋尊は不造正意

なり故に金剛般若經に若し三十二相を以て如來を見ば轉輪聖王も亦これ佛なりと云ふ其偈文には若し色質形相を以て我を見る者は則ち之れ邪道を行する者なりと嚴誡を垂れたり金色燦々の佛像にのみ憧憬るゝ者よ汝の行ふ所直道にあらざるなり法華の流通たる涅槃經にも佛滅後魔王猶三十二相を現して說法すること有るを豫言せり是れ等は皆末代に色相の佛を制止する讖文にあらずや況や法華經には此經の中に既に如來の全身在ますが故に餘の形像舍利を安置することを用ゐずと嚴禁せり是れ經文に顯然たる偶像排斥論にあらずや

◎日本の惠日大聖尊

を忘れたる不幸なる同胞よ、速に汝の我慢偏執を去て、本佛日蓮の靈光に接せよ、何時まで勸請雜亂の化儀に滿足せるや。知らずや本佛日蓮を信ずるは、人類の靈性を解する者也。大日本の使命天職を信知する者なり、世界の歸着を悟了する者と云ふべし。普通佛敎や基督敎は共に西方渡來の過去文明に屬せり、最新科學の文明も亦た將さに逝かんとする者の如し。あゝ來るべき最後の文明は何ぞや、他なし智惠の光明日の照らすが如く、遊行畏れなきこと獅子王の如く、情意の詩趣その淸きこと蓮花の如き、扶桑の惠日大聖人の法光威德これなり。斯れ之を靈的第三帝國の基礎と云はずして可ならんや。一切世間多怨難信とは云ひながら、斯の光明生活の裡にある日本國民は、何等の宿福ぞや光榮なる哉。抑も吾宗祖の不造正意、造像傍意なりしこと文證列擧すべからず。法蓮鈔に愚人正義に違ふこと

今昔異ならず、迷者の習ひとして外相を貴んで內智を尊はずとの給へり、造佛の徒深く反省すべきなり。身延山抄に釋迦の御在世に五天第一の名工毘首羯摩をして尊像を作らせしかども一相だも生身佛に似せ奉ること能はざりきと暗々裡に末世の偶像教を警しめたり、況や營利的の佛師屋の手に成りし塑像を安置して、草木成佛の模型と稱するが如き滿々たる稚氣をや、

本尊問答抄には釋迦多寶等を以て本尊とするは法華經の行者の正意にあらずとて脫迹の佛像陳列の義は堅く禁遏せられたり、妙法曼陀羅抄、經王殿抄、顯佛未來記、聖人知三世抄、觀心本尊抄、開目抄、撰時抄、報恩抄、三大秘法抄、初心成佛抄、四信五品抄、興記、向記、本因妙抄百六箇抄、本尊口傳、產湯記、已上は皆不造正意の玉條を以て充されたり、或は妙法本尊說あり或は元初の本門釋尊說、或は地涌卽本佛說、或は人法一體說、或は三身寶號說、或は壽量本主論、等の法門ありと雖要するに不造正意論なること疑ふの餘地あることなし、予は不造正意の文證及理證を揭示することに於て毫も人後に落ちざることを聲明する者なり、

若し夫れ百尺竿頭一歩を進めて要山の史實に徵せんか實に前陳の如きものあり て、其大多數は不造主義なること毛頭疑なし、速に日濟猊下の聖斷を待つ。然らずんば布敎本部を要山に置くなどと宗會に於て決議すとも例によりて例の如く告朔の餼羊にして測候所の天氣豫報よりも賴母しからざるか噫

◎大導師興尊も不造

論を正意とせり門徒存知抄に大聖人御立の法門は全く繪像木像の佛菩薩を以て本尊とせず、唯だ御書の意にまかせて妙法五字を以て本尊とすべしと此文明鏡に向ふが如し。唯全の二字豈に嚴誡の象徵にあらずや、直專持此經、但行禮拜の經文と異曲同工と云ふべし、醒めよ々々々美的假象論に何日まで囚はれつゝありや、原殿御報に云はく日蓮聖人出世の本懷南無妙法蓮經の敎主釋尊とこれ御義の三身寶號の法門と同義にして、宗祖本佛餘佛不造の明文なり、同しく門徒存知抄なれども伊豫阿は日興が義を盜取りて四士を副造とあり、此等は憧憬木像の一機に對し

て暫く四士を添加することを許すものにして唯だ一體の立像佛を安置するに勝ることと萬々なるが故なり、先づ考一考せよ劣應身の立像佛に本化の四大士を添造すること既に鵺的の變態にあらずや是れその容與の御釋たること知るべきなり、蓋し日興が義とは五老の立義に簡別するものなり、此一句を執して興師再往の實義とせんか本化弘通の眞價に疑なき能はず、自立廢亡の甚しき者ならずや興尊何ぞこの自家撞着の事あらんや故に興師も不造と斷ず然らば

◎目師と大學頭日順師

は如何これ又不造正意なること明白なり、夫れ目師は關西の化導なし、其法系は大石寺久遠寺妙本寺等に傳燈せり。是等の諸山曾て造佛論に熱中せし人を見ず、目師の不造主義なること又一點の疑なし、三位日順師詮要抄に云はく久遠元初の自受用報身如來とは蓮祖聖人の御事なりと取定めて申すべきなりとあゝ富士山本門寺根源の補處たる順師の眞意亦た瞰ふべきなり、順師心底抄には安置の佛像は本尊の圖の如しとあれども素より附文一往の意なる而已想ふに當時像法の殘機とも稱すべき多數信徒は造佛の因襲を容易に脫却する能はざる者あり、されば暫らく言を廣布に寄せて婉曲なる制裁を加へしのみ造立禁斷の內證ゆめ疑ふべからず機鋒峻嚴の聞へ高き日興師猶門人に對して與奪の兩釋あり、況んや順師をや宗門草創の際に當りて其新進の信者を調養奬護すること亦た爲人生善の善巧ならずや四悉適時とは是なり

◎尊師實錄の價値を知るべし

血脈抄に云はく日本乃至萬國に流布せしむると雖日興嫡々相承の曼陀羅を以て本堂の正本尊となすべきなりと。是れに付けても愚にも付かざる造佛論などを喋々することは最も謹しむべき事なり、彼の廣布の裁斷を祈るべく造像强行の擧の如きは輕擧の誹なきか盲動の笑を招かざらんや日興門徒の、恥辱なるなからんや、犬師が筆記裝束せしと傳ふ開山實錄の全部錯簡あるや必せり悉く信ずるに足らざる

なり、遠くは辰師近くは海師皆其意見ありしものゝ如し彼の發明尊門義の如きは此書に依りて立案せり非難多き所以なり文義矛盾の鮮からざる亦た勢の然る所なり、先師既に尊師實錄眞僞決の著あり、あゝ悉く書を信せば書なきに如かずとは是なり、日大記の實錄は僞書なりとの論者云はく該書一部の中に衆難あるのみならず文章野卑にして學者の筆策にあらざるや明かなり、或は一期の圖と題して最後夢中の圖のみを記するが如き或は平生開口の眠態臨終閉口の睡容の如き抱腹すべきものゝ一なり又尊師入洛の年數最も不都合なるものあり。先師云はく未決の書に依りて發明尊門義などゝ題して高慢ぶること頗る聖意に背けり、と、宣なるかな法華眞言勝劣抄に弘法が菩提心論により十住心を立て天台法華を花嚴の下に置きしことを說破して云はく此の菩提心論は龍猛菩薩の作と云ふこと古來より議論あり、議論の絕へざる以前に龜鏡を立つること法門立義の法に違背する者なりと……實錄盲信の徒以て如何となす、

讀者誤て尊師を輕視する者となす莫れ予は實錄の一部に疑を存するのみ若夫れ開山崇敬に至りては敢て人後に瞠目するものに非ざるなり、唯だ聖判は公事なり實錄は私記なり後人の添加固より計り難し何ぞ私を以て公事に混すべけんや夙に公開せられたる菩提心論猶菩薩の作なるが故に宗祖は之を彈劾し玉ふ況んや尊師實錄と稱する日大記をや、加之ならず此記は聞書にして開山の眞蹟にあらず尊師の眞蹟と傳ふる諫國狀、置文、血脈書の奧書等にすべて造佛の所論なし獨り怪しむ此錄のみ三聖の本意に背き尊門義を主張すること不審千萬なり之に由りて予は實錄の一半は全然後人の添加と斷するに於て躊躇せざる者なり、於戲淨行菩薩は大導師に無邊行菩薩は天皇に安立行菩薩は皇后に、上行菩薩は總理大臣に、再誕まします時六萬坊の建立あるにあらずや造佛主義者よ此時に當りて一時に數十百萬體の佛像を彫造せんとするか愚も亦た甚だしと云ふべし噫卅三間堂猶笑を後世に貽せり殷鑑遠からず深省すべき事ども なり

◎日尊上人の不造主義

なることは事實なり、其最後鶴林の砌り補處日尹上人への付法の儀式を見よ、唯

興尊書寫の大曼陀羅と上行院奉安の祖像のみにあらずや、曾つて色相佛なご讓與あることなし。不造正意なること明白なり、實錄に云はく興師の仰に云く末法には繪像木像等崇敬憚かりあり廣布の時まで大曼陀羅を懸け奉るべしと、嗚呼何故に畏憚し玉ふや時機國土すべて不相應なるが故か、これ又事を廣布によせて婉曲なる造立制止案を立て玉ふのみ和光利物の一端と云ふべし、

天子將軍をも孤豚を逐ふが如く、木偶を操つるが如くにして威權赫灼、天下を脾睨せし北條時頼を叱咤し靈的無上の權威を奮ひ、閻浮の一聖、日本の柱、當帝の父母、と名乘らせ玉ふ偉大なる聖日蓮……も其同情の博大深淵なるに至ては、一介の老媼の爲にも熱涙を濺ぎ、一匹の老馬にも綿々たる恩情を垂れ玉ふ大悲の本佛日蓮聖人がその信心奬護の爲めに彌陀念佛全盛の當時釋尊造立の徒に對して過分の賞歎を垂れ溢美の消息を賜はること亦た當然の理ならずや。又以て先聖が佛像造立に對する本志を知るに足らずや、

されば相構々々一尊四士の畧本尊を造立して、廣布の裁斷を奉待べしと大記に載せたりと雖も亦た何の疑網か之れあらんや、王城最初の弘通なれば奈良朝、平安朝、鎌倉時代より流れ來る七百年來の因襲に囚はれたる佛像崇拜の思潮は亦た容易に撤回し難き者あり故に佛意を隱蔽し機情の一面を宣傳する亦た止むを得ざるなり。若し然らずんば焉んぞ南岳の三法妙、天台の九法妙に簡別して心法中の三法妙等の所立あらんや、それ尊師一代の神髓とも云ふべき法門とは何ぞや。所謂佛法妙を以て能開こせる本門觀心の三法妙是れなり知らずんば有るべからず、學ばずんばあるべからず、

傳に曰はく釋日尊は刹利姓なりと其れ或は然らん。古聖相戒めて云はく偏なく黨なく、王道蕩々、黨なく偏なく、王道平々とあゝ吾が開山眞に王者の苗裔ならんか必ずや王德なかるべからず、果然其事蹟の中に王氣の鬱々葱々たるを認めたり、何ぞや四悉の廢立二門の取捨最も其の宜しきを得たるもの是れなり。其上行院に住するや立像の釋迦佛及び迦葉阿難等の十大弟子の木像さへ暫く檀信の調養策として安置を默許せられたるにあらずや、其出雲簸の川上に於て淨土教徒の捨邪歸

正する者あり、啻に安養寺の舊名を襲ふのみならず、その本尊たる彌陀尊をも僅かに印相を改むるのみにして久遠實成釋迦牟尼佛と開眼し玉ふか如き、皆これ法王諦觀の資ある者の所作佛事にあらざるなからんや。行解の徹底せざるものは這般の消息終に解すべからざるか

◎絶對の法將釋日尊

荆溪大師云はく、着を以て惡と爲し達を以て善と爲す絶待の意なり、圓に著する尚惡なり況や復た餘をやと吾が開山の如きは寔に絶待家の法將と鑽仰すべからずや、あゝ木繪像に着するを以て惡と爲し直に正境に達するを以て淳善と爲す此は絶對妙の意なり釋迦多寶に着する猶ほ惡なり況や亦た餘佛餘菩薩をや相待絶待俱に須らく惡を離るべし斯れ之を妙法と云ふ。當家第三の法門光顯するの時や到れり機や熟せり、然而して猶ほ造佛論に花を咲かせんとするもの少からさるが如し。迂遠にして事情に濶れりとは此輩を之れ謂ふか吾人は守文の徒の質直に敬服すると同時に其耳を掩ふて鈴を盜める者を笑はさるべからす彼等造佛の一事にのみ熱中して遺誡を守るものゝ如しと雖も聖犯二類僧徒の事に至ては則ち初より知らさるものゝ如しあゝ汝等僧徒の淑行は如何。何ぞ乘戒俱に勵行せざるや呵々

◎要法寺か雜法寺か

假りに百歩を讓りて大記の實錄を鵜呑に盲信するとしても吾山の新堂又の名を三寶堂と稱す或は云ふ釋迦堂と之を明細誌に徵すれば本堂と稱せり附會に巧みなる先進某は眞堂なりと牽强して得々たり。あゝ法華は十七種の異名ありて經旨を宣揚せり吾山の一新堂は五種の異名を建立されて本末緇素をして岐路に泣かしむる者多年なり名の忽緒にすべからざるや此の如し、夫れ何れの在所たりとも上行院と號すべきに要山何ぞ二尊院の新造をなせしや嗚呼和光同塵は缺緣の始めか怪壇建立尤めに倣ふ者は誰ぞや、

尊師實錄には一尊四菩薩を勸奬し玉へり然るに造佛主義の先賢は多寶佛及四天二

明王等を私かに副造して畧本尊と稱し順縁廣布の祈禱所と誇揚するに至れり、其甚しき者に至ては畧とは限也なとゝ訓詁を作りさては摸範式の造像と自稱するに至りたり吁嗟これ四聖を恥かしむるの優なるものなり。尤も笑ふべきは日順記を盲信し大曼陀羅を以て造佛の雛形と意得するに至る最早や沙汰の限りと云ふべし、本時上行玄宗の極地、要法傳受の大本山、何ぞ畧本尊の要あらんや、廣畧何れにもあれ、造佛主義の標榜ある期間は造像本山雜法寺と改稱するこそ然かるべけれ

◎中興辰師は内鑑冷然

の權者なり師か永祿二年五十二歳の時造佛讀誦論の作ありしを以て造佛論の中興開山なるかの如く稱するものあり是れ誣妄の甚しき者なり。辰師の正意は不造主義明白なり此の斷案は先師にも往々之れあり、予の臆想にも網見にもあらざることを宣誓すべし、抑も天文法亂後宗門漸く軟化せんとす永祿規約の如き者あるに至るこれ其現證にあらずや。されば吾が辰師も化他の宣傳を表こし權實の起盡を

糺明し。主として本迹の異目を辯明せり數百の論議述作は祖承の深義を究め護法の志を策勵せんが爲なり。その末學法孫の爲に計るもの眞に絶前光後とも賛すべきなり。二論義本因妙精義の下に云はく本門に於て種脱の勝劣を立つること諸門になき所吾が門の獨歩なれば自他流の學者多く疑惑を生ぜり。之に依りて予れ願て道場に入ることを得少しく靈驗を蒙り朝たに道を得て積年の猶預を散すこ往昔源信僧都が念佛主義を悔改めて一乘要决を著はすや既に今生の矇を開く何ぞ夕死の恨を遺さんやと云へり。口調甚だ相似たらずや我辰師に對外的法門あることを知らすんば未た共に辰師の堂奥に入る事能はさるか。顧れは天文五年の大法亂の時師は春秋二十九歳なれは本隆寺眞師の講筵に通學時代か。天文二十三年四十七歳の時本迹問答抄法華訓蒙抄成る蒙抄安樂行品觀心の十惱亂を釋するの下に云はく觀心本尊抄顯はれて見れは唯た本門の教主釋尊を本尊とすへき由報恩抄、取要抄等の如し但し本尊問答抄唱法華題目抄は七字本尊の由を判玉へり尚ほ々々當流の本意は日蓮大聖人を末法下種の本尊と仰き奉るへしと申す義あれとも此は適時

の法門にして輕々に申達し難きか故に存畧せしめ候と……時機尚早なるが故に當家の極意たる宗祖本佛の觀心は暫らく抑止在懷して披露することを見合せたりと云ふものゝ如し。斯くて弘治元年四十八歳にして正さしく十三代を紹繼し日在上人と座替式の擧行あり越へて四年永祿元年五十一歳にして彼の血涙千行の慨ある負薪記の作あり文に云はく日興門徒の聖教とは日興記、富山立義抄、用心抄。心底抄、置文、門徒化儀抄、兩卷血脈、錄内外の御書等なり此等は文釋會通常途の料簡と各別なれば智者は明らめ易かるべし乃至本寺末寺に智者なし誰人に逢ふて學文すべきやと吾山法門審議會の委員たる者何ぞ愧死せざるやあゝ諸師が全科玉條とせる實錄の如き又大師の十番問答の如きは日興門流の聖教圈中より除外せられたることは最も注意すべきことならずやあゝ實錄の地位や推して知るべきのみ、聖語に云はく日蓮が弟子等は易く之を知るべしと信智一如なれば往くとして可ならざる者なし、「法華經の信心は傳子病の如し」、「此經は相傳にあらざれば知り難し」、と蓋し相承を重んずるが故か、吾れ故に曰はく造像問題の如きは隨方毘尼の

一邊なり洛陽以西の土習を鑑み時措の宜しきを得る可なりと由之言之要山五十有一世の法主たるもの其内證や朗然照映、千車轍を同ふする者と謂つべし寄語す造佛熱中の諸師少しく冷靜に復へらんことを。

辰師又序品畧消の下にも末代吾等が下種益の觀心を說いて詳細を究めたり。又自我偈抄の中にも本果以前の本因妙あることを說き。若くは本門は從果向因の四字三大部中に於ては未だ之を勘得せずと云へり。大凡そ辰師の下種正意論宗祖本佛論の筆記としては中年時代には祖師傳あり晩年には種脫得意抄ありと雖も後世先師の如き露堂々たる者にはあらざるなり然りと雖永祿六年五十六歳の著作同門中異論抄の中に云はく日蓮日興大事の法門は本因妙百六箇の本迹に過ぎずと此一語既に造讀論を捨てられし明證か何となれば兩卷血脈は始より終りに至る迄造讀の義あることなし。是ある哉高足闕師辰師の滅後拾有二年石要兩山の盟約ありて以來、富士山林の祖風は穆如として京洛の地に來り亦た學究的爭論なかりしと云ふ、中興日辰の尊稱此に於てか光焰萬丈と云ふべし、先師日辰を渴仰するの極その小

傳を作りて云はく釋の日辰本地は○○迹に日辰と現はる先權後實恰かも佛の如しと……あゝ偉大なる哉中興辰師その道風德香千古に傳ふるに足らずや。

◎二身俱失の要山三寶堂に

奉安せられたる諸尊像は軈て理戒壇たる法寶藏へ還元し玉ふべきか其前兆は近く二十年前に現はれたり彼の半永久的に閉鎖の運命に陷り玉ふ者これなり。蓋し時の然らしむるか抑も亦た事相それ自身が招き玉ふ運命なるか吾れ之を知らず、何をか二身俱失顚倒迷亂と云ふや、曰はく取要抄に此の多寶如來も亦た壽量品の釋尊の所從なりと、噫吾山新堂の法式は主君と所從との同座せるものにあらずや本門觀心開顯の時この下尅上を忍ぶべけんや、斯の如きは住本顯本にもあらず、開迹顯本の化儀にもあらず、咄々怪事にあらざるなきや、去れば吾が二尊堂の釋迦佛は既に應佛昇進の如來にもあらず況や元初の自受用報身の佛とは天淵の差にあらずや、古今人ともに迷はざらんと欲するも得べからざるなり、

◎祖像奉安は重復

にあらずやこれ亦た一種の造佛主義なればなりと、此等の愚難暴論は窮餘の苦言とも云ふべきか。苟くも其本を揣らずして末を同ふせば方寸の木も岑樓よりも高からしむべしとは斯かる淺識謗法、不解謗法、の徒輩を之れ謂か。昔し山中萬匹の鼻缺猿あり一匹の鼻正しき老猿の來るを見て笑ふて云はく彼の老猿何ぞ鼻の清脩高直なるや彼れ或は畸形兒ならんかと論者が最後の悲嗚も亦た此に類せずや。

所々、

既に正本尊を奉安せるにも係はらず。蛇足千萬にも略本尊廣本尊などと稱し數多の佛像を安置し。香華燈明の供養も充分ならざるのみならず、尊像は鼻と云ひ耳と云ひ到る所負傷の憂に沈み玉ふが如きは。獨り人心に快よき事なからんや。良知を害し良能を損する亦た大ならずや徒善徒法、煩重複雜、未だ是より甚しきものはあらじ。吾門古來より大曼陀羅の御前に必らず大聖尊の御影を奉安する所以

のものは人法一體、色心一如の表幟なり其れ中尊南無妙法蓮華經日蓮とは心法なり。御尊像は色法なり則ち久遠本因妙の教主は心法にして末法垂迹の大法主は色法を表す本迹宛然と雖も本の迹は迹にあらずの活釋意を留むべきなり。第六十四番下種の今此三界の教主とは誰ぞや久遠元初の天上天下、唯我獨尊とは日蓮是なり三世常住に名字の利生なりと名乗らせ玉ふ深く懷ふべきにあらずや。乞ふ聖像の奉安を以て脱迹佛の造立と同一視すること莫れ有供養者、福過十號、若惱亂者、頭破七分、兩文相承の口傳仰いで信ずべし伏して思ふべし、

◎餘佛不造とは何ぞや

宗門寫本中最古の者として現存せる日順師が詮要抄又の名を本因妙口決と云へる者は本因妙鈔の活釋なり、文に云はく此は元初の報身無作本有の妙法を直ちに唱ふとは高祖名字の凡夫と下つて理卽の我等を救濟し玉ふ教彌よ實なれば位彌々下だるとは是也久遠元初の自受用報身とは本行菩薩道の本因妙の教主日蓮大聖人の御事なりと取定め申すべきなりと、聖影造立餘佛不造の義御本尊に契合せり下種今此三界皆是我有の大導師にて在しませばなり。越後の造立尺尊、眞間の尺尊及大黑天の供養、日眼女三十三歳厄落し等の造像を讃すること聖の御在世に有之と雖も未だ我こそ上行の後身なれども御名乘らせ玉はず。示同凡夫の日に於て法華宗の本尊を建立せざるべからず。去れば爾前に同する邊もなきにしもあらず。業に既に世界未曾有の大曼陀羅尊現はれ玉ふの後ち何ぞ脱迹の諸尊を造立するの要あらんや。夫れ此御本尊は何事を表するや末法大導師の化用を本尊と顯はし玉ふ讓與の法體妙法○經なり、所詮上行の御身法華經ならずや、本法所持の人、豈に本法の覺體ならずや、既に本法の覺體なり之を久遠本佛と信解すること亦た可ならずや。大凡導師は何れの時にも唯我一人なり、今夫れ七字を本尊と崇め奉り導師を本とする時日蓮聖人體內所具の二佛三佛と習ふなり能具所具を知らずして造り顯はす時、導師に迷惑して信心二途に亘らんとす、唯だ大聖人を信じ奉るとき二尊四士乃至一切の佛菩薩を信ずるの德功を完備するが故に本宗に於ては斷惑證

理、在世正宗の機に對する釋尊を以て本尊と奉安することを禁しめたり。あゝ一念三千卽自受用身の尊形、二佛三佛等に超絶せる唯一の尊容たる人法不二の大本尊を信奉して何の不足が有らんや。

法華に云はく但だ大乘經を持つことを願ふて餘經の一偈をも受けざれと。一佛一法の御立義なれば餘佛を造立し餘法を受くること是れ各修各行の雜亂の厲階たらむ。法華經第廿二章には正像の殘機の爲には餘他の深法を以て示教利導せよと說けり、彼の造佛讀誦等に熱中して日も亦た足らざるの徒は亦たこれ餘深法中に嬉々として反へることを忘れたる流類か噫。夫れ外小權迹を內大實本に望むれば但だ名のみ有て實なしとは妙樂師の警句にあらずや思はざるべけんや、本佛本法、此はこれ一法の二義にして明闇去來の同時なるが如し人法一如、甚深の妙旨、信知せざるべけんや。實相抄に云はく釋迦多寶の二佛と云ふも用の佛なり、妙法○經こそ本佛にては御在まし候經に云く如來秘密、神通之力と最も鮮明ならずや報恩抄本尊抄取要抄等餘佛不造の明文列擧の煩に堪へざるなり。

吾が家文底觀心の修行、之を不渡餘行、直達正觀と云はずや、應昇進の佛、塔中の二尊などを造立すること洵に渡餘行の所作にして當家の極理たる觀心本尊とは風馬牛相及ばず易に所謂天地否の卦これなり禍の根本と云ふべし機法一體、それ感應唐捐ならんや地天泰。とは是なり輔正記に本地の三身を以て體と爲すと云へり迹中の三身は用なること知べきのみされば三身卽一體の本佛尊容を造立することは妨げざれども色莊の餘佛、過時の迹佛、を造立すること時國不相應、境智不對の難あるを奈何せんや毫釐の謬りは千里の差なり發心僻越するとき萬行徒施なるべし懼れざるべけんや。

◎反本法的形骸の慘禍

宇內萬邦一千三百有餘種の宗教！　何れの宗教が繪像木像の崇拜ならざる者やある唯獨り日興門流のみ本佛本法の現實的具象化として尊信することを得べきなり。吾人は敢て內容の生命觀に拘泥して形式の表現を度外視するものにあらず。

何となれば生命は表現を要求して止まざればなり。然り形式の表現は大に尊重すべしと雖も若し夫れ表現なるものが。内實の生命を失ひ了りたる時に於て其の形骸に何等の價値あるや。其は極めて空疎なる一片の殘骸にあらずや。かゝる殘骸を因襲的に保守し隋力的に翫弄して五百七十有餘年の久しき汲々乎日も亦た給らず諺に云ふ蚌蟭の爭ひは漁夫の利となると悲哉。必然勃興すべかりし宗門、今安くにか在るや。底事ぞ孤城落日、悲風慘憺たる現時の光景、あゝ宗祖中心の主義に遠ざかれる脱迹的の形骸は良に咒詛すべきものに非ざるなきか。汝ち何ぞ夙夜に信仰の寸心を改めて速に日蓮本宗の躍動せる生命そのままの表現たる。人法の正本尊に向ひ奉り目不暫捨的白熱の信心を捧げざるや。

◎米搗八藏の觀心

八藏は信濃の人なり同僚數輩と共に職を江戸に求む友人或は車を挽くあり妓夫と成るあり彼は獨り大道春を擇べり是れ往時の藩士俸祿を玄米にて頂き大道にて之を搗かしむ故に武士の米搗を稼業とするもの之を大道春と云ふとかや。彼の友人は花柳を攀折して終に蕩兒の群に入りしが八藏や粗食弊衣卅年一日の如く玄米の剝脱に勤めたり。五十にして居然として一大富有翁となれり。乃ち銅はすべて銀に銀は悉く金貨に兌換して數萬枚を獲たり之を以て大商賈とならんともせず金貸業者ともならず。融通のきかぬこと甚だし攝受主義退嬰主義とや云はん。彼れは巨萬の黄金を如何にせしや花の晨月の夕べは云ふ迄もなく春雨蕭々の夜にも秋風寂々の朝にも。興到れば幾萬の小判を席上に陳列して弄翫之を久ふするを以て無上の樂みとなせり。友人之を戒めて云はく汝ち遠く故國を去て東都に勞苦し今や都下の富翁となれり。宜しく金衣玉食すべきに但だ之を弄ぶのみとは一猫兒にだも如かざるかと。八藏笑ふて答へず相變らず小判を弄ぶを以て能事とせり。彼れ今や八拾の頽齡病危篤に瀕せり。友人枕頭に集まり問ふて云はく萬一の塲合遺産は如何に處置すべきと。八藏云く厚意謝するに堪へたり吾れ既に五十餘年間燦然の色を弄んたり。吾が志願達せり夫れ生老病死。十二流轉は人生の常態なり。吾

れ臨終に際し何ぞ黄金に未練あらんや。予か五十年間の見殼剟り殼には又た用事あることなし。汝等所望ならば宜しく分割し去れと。守錢奴の如かりし八藏は案外清淡寡欲の言を發し終て。莞爾として永眠せりと云ふ彼も亦た一種の達者にあらずや。世の中は何時も月夜に米の飯。さて又もうし金の欲さよと諷せし太田南畝の徒か。己上は種脱百喩經とでも題せる明治大正年間の出版中に編入すべきか呵々來入末法既に八百有餘年。然而して猶ほ色莊の佛菩薩金色燦然の幻影を陳列せずんば信仰を喚起し能はずと云はんか噫米搗八藏の達見にだも若かざるなきや思はざるの甚しきなり。

◎眷師法令を評す

要山廿六代日眷上人は造讀論者の優者なり初めて宗教政策的に法令を發布したり文に云はく

一、佛壇の體裁は中尊兩尊四菩薩四天を安置し奉るべし但し餘尊造立の儀は外緣の力に任すべし

一、一部修行は尊門の常式の事但し廿八品傍正の意味忘るべからざる事

一、朝夕勤行は方便壽量陀羅尼普賢咒を讀誦すべきこと　以下二條畧之

右は開山以來の舊規なり乃至最もこれ佛法興隆、本末和合の爲なり、以上

あゝ此の眷師法令の如くんば吾が尊門義の内容も亦た知るべきのみ、吾山造佛論に熱中せる蓮成院智傳院勇道院、八木日融その他の有像無像に至るまで此の法令を盲信するや否や、日眷の迷亂一に何ぞ此に至たるや彼は此の如くにして猶ほ要山貫首の神器を擁せしか聖跡を汚がすこと恐くは之よりも甚しきものはあらざるなり。

當さに知るべし此の法令は素より化他機情の一邊なることを暫らく社交的に文上の經說に付順し權實判の宣敎を行ふのみ、陽に敎相の本尊を稱揚すと雖も其自行證道の日は萬々然らざるか若しかゝる法令を以て末法適時と誇らんか讀誦謗法。造佛墮獄。の毒皷を鳴して之を粉碎する亦た乃祖に忠なる所以なり、

◎頑迷なる哉造讀論者

吾山をして去勢的宗團たらしめし者は其れ造讀論者なるか造讀は雜毒に通ず猛獸毒蛇の慘害よりも大なるものあり。宗門の考證學者として一時盛名ありし立正日融は近畿地方の代表的造佛主義者なり其の尊門家用心抄に云はく寛政法亂の後出雲本妙寺外卅七個寺の住職等は、蓮興尊大辰饒舒眷の書を捨てゝ不造正意を立てんとて離末を企て廿八代日全以後邪師の末弟とならんとす笑ふべきなり。あゝ今時は日全を元祖として大石寺の心なり、元來要法寺僧と生れて不造不讀を申募らば先づ寺號は誰れが始めたりや寺域は誰れが再興せしや能く々々之を思ふべし。評定判に日辰花押を用ゆることを停めて日全の花押に改むべきなり、全慈良住立等の邪師は他門横入次第昇進の貫主ともなれば身は要山の當職なれど心は石山の塵に染まれり就中住師立師の如きは法亂後は其心中まだら也云云と……傍若無人の毒舌を振ふたり一代の學者を以て任ぜし八木日融が心事すでに斯の如し況や彼以下の羊僧豚僧羝僧馬僧、狗犬の僧どもをや。日融が言の如んば大辰饒眷等の如き確固たる主義定見を發表せざる人師を以て直ちに四聖に同ぜんとするものゝ如し愚も亦た甚だしからずや殊に蓮興尊大とは吾山の師資を紊亂する獅蟲にあらずや日融若し丈夫僧ならば當時三妙院生師あり妙高院海師あり皆これ汝が所謂邪師日全等の亞流にして心は石山身は要山恰かも慈覺智證のそれの如く身は叡山の雲の上に在れども心は東寺里中の塵に交れるものとせば京阪の路甚だ遠からず汝何ぞ生海二師に向ふて戰はざるや怯弱下劣の頑僧なるかな。方今猶ほ造不兩系の先師が内證をも究めず猥りに不造先師を罵倒せんとする鼠輩甚だ少からざるなり。雜毒の衣鉢を傳授せる老僧中僧青僧は到る處に蟠屈して鋒火相見へんと欲す。あゝ斯くして要山の相承は摧破せらるゝに至る悲しむべきかな……猊下乞ふ法門審議會を督して良師法令の復活を企てられん事を。現時八木日融の如きもの往々なきにしもあらず然れども猊下の聖斷に對し誰れか濟師の心中も亦た魔陀羅なりと嘲ける者あらむや呵々

◎眷良二師地を易へは皆然

かり試みに乃木大將をして建武の朝に立たしめば湊川偶刺の事あるや必せり。楠公をして明治天皇に奉仕せしめんか希典將軍の壯烈無比なる悲劇あるや疑ひなし。乃木氏楠氏地を易へば皆然かり禹稷顏淵道を同ふすこは是なり。先聖後聖其揆一なりこ眞なる哉大凡そ古聖賢の世に出づるや。言過きて行ひ及ばざる者あり無道の世是れなり、行ひ過ぎて言論及ざる者あり有道の聖世なればなり。彼此對較して始めて其中正を得べきなり。其詩を誦し其書を讀み而して其世を論す是れ之を尙友こ云ふこかや。然かり吾が先師の志尙論議を拜するに當ても。其時こ處こを深く察せざるこきは其主張天壞も啻ならざるかの如く爲めに採擇を誤まるここ少からず吾山眷師法令こ良師法令の如き是なり。法華經は一法なれこも時こ機こによりて其行萬差なりこの聖訓を信讀するこき。誰れか亦た蓮興尊大辰饒眷なここ。愚想漫論に囚はれて師資破壞の邪相承を建立するものあらむや。

◎造佛論者同士打の一例

こして玉野志師を照介すべし日志は近代造像の大家なり然るに師は要山造佛の巨頭こも稱すべき辰饒舒眷を冷評せり志師自筆の對見私記、見聞雜記、等の一節に云はく……日辰の讀誦論。二論義。勉旃鈔。なこに但行禮拜の文こ疏の讀誦經典是了因性の文こ記の不專こは不讀を顯はすこの文に付て相違を會して自行化他こ云へり嗚呼大德疏の文を誤れり日寛師五失を以て之を糺す往て見るべしこ饒師の到彼岸記に題目こ壽量品こを以て正行こ募れり嗚呼題目正行壽量助行なるここ誰れか異義あらんや饒公の義開山以來當代日進上人に至る迄曾てなき荒義なり、石山寛師云はく一家都て此義なし所破に足らずこ宣べなる哉……舒師の對見記に云く。一向に讀誦等の助行なくんば不專誦讀にあらず專不讀誦こ云ふべし。不輕既に五種の行あり當流何ぞこれ無からんやこ。智傳曰く記に不專等こは不讀誦を顯はすこ舒師何ぞ本末の義に荒量なるや若し義の如んば但行禮拜

の四字何んが消通せむ……日將云はく正法華に云く不肯讀誦こあゝ舒師何ぞ嘈騰こして昏夢の中にあるや上來造佛三師の讀誦論に付き玉野志師の駁擊は一々致命傷を與へたり。而して志師後年造佛を主張せり何ぞ尤て而して之に傚ふや噫。日悅が見聞取捨抄に辰師の會通同異抄を引て云はく。三千に多種あり第一は妙法の三千なり。第二は因果國の三千なり。第三は依正の三千なり。第四は本理の三千なり。第五は事行の三千なり云云。日眷三妙合論事一念三千を用ゆること日隆の義に依れるか一山の貫首に不似合なりこ之を破斥す……日將云はく眷師の御法令を見よ法華本門宗の貫首こしての價直何處にかある師が迷亂亦た甚だしからずや。嗚呼一山の貫首に不似合なるもの豈に獨り眷師のみならむや、

◎三寶一體章第二

玄文第七に過去は最初に證する所を名けて本こ爲す本證以後方便化他を以てする發迹顯本も還て最初を指して本こ爲し。中間示現の發迹顯本も亦た最初を指して本こ爲す。今日の顯本も亦た最初を指して本こ爲す。未來の顯本も亦た最初を指して本こ爲す、三世は殊なりこ雖も毘盧沙那は一本にして異ならず百千の枝葉同しく一根に歸するが如しこ云へり。

道念堅固にして志あらん者は此玄文を三復拜誦せよ亦た以て天台智者大師の默識心通、內鑑冷然の眞價を了々分明ならしむべきか之を領解するものは左の五節に分たざるべからず

第一　本時自行卽座開悟の本佛なり、本地自行唯與圓合こは是なり。

第二　本果報身如來の成道なり。化他不定亦有八敎こは是なり。

第三　中間の八相成道なり。我說燃燈佛等こ說かれたり。

第四　印度國靈鷲山の從本顯本の成道なり。然我實成佛以來の經文これなり。

第五　大日本國の新成顯本。滅後末代眞身の成道なり。開目鈔に云はく九月十二日子丑の時頸刎られぬ此は魂魄佐渡の國に至ることは是なり

血脈抄に本地自受用報身の垂迹上行の……再誕……日蓮この玉ふされば再誕の

言や上の二句を管すること明白ならずや盖し本地本佛上行菩薩日蓮大聖人この三聖名字不同なりと雖其體これ一なり。今日蓮が修行は久遠名字の振舞に芥爾ばかりも相違なしとは是なり、既に本因妙の教主本門大師日蓮と名乘り玉へり其位妙行妙全然久遠元初の本佛に在まさずや。記九に云はく一念信解とは則ちこれ本門立行の首めなり。觀境いよ〳〵深ければ實位はいよ〳〵下ると蓮祖あに吾等が導師にして本尊に在まさずや。三世常住復遇日蓮なるかあゝ杖柱とも賴むべしの聖訓は造次顚沛にも忘るべからざるなり。是れ當家の根本生命なり顯說法華經の冲微なり。本化別頭の淵底なり。

止觀第六に云はく前教その位を高くする所以は方便の說なればなり。圓教その位を底くする者は眞實の說なればなり。弘決第六にも教へいよ〳〵實なれば位ひいよ〳〵下れりと釋せり法華の人法永く衆經に異れり記八の本化別頭の稱あに眞ならずや古人云ふ高祖の教觀永がく諸家諸流の跡を師とせず其所判古今に獨步す下種の法華は獨一の本門なりとの玉へりされば經釋に合するも可なり合せざるも亦た可なりと嗚呼洛南深草の一隅に這箇の獅子吼をなせし元政上人は亦た本化の流類が卓越せるかな此の一隻眼！

上來列記の釋義はすべてこれ吾門下の龜鏡なり。朝誦暮唱以て本因妙行に資すべきなり。一體三寶の深秘を信知せんとならは。此等の疏釋は拳々服膺忘るべからざるものか然るに吾が

◎日蓮宗の三寶式

なるものを見よ。何ぞ其れ區々たるや。或は一法二尊の三寶式あり。或は畧本尊として一法二尊四士四天などを奉安するあり。或は三世の本尊と稱して釋尊蓮祖彌勒菩薩の三尊を安置するあり。偉大なる祖像一體を奉安するあり。或は殆んど十界全圖の如く造立して大黑天などをも安置する本寺末寺も亦た鮮からず。然り此の如き法式も時に崇敬すべき三寶尊なりと雖も。未だ宗祖の眞意義の表現にはあらざるなり。然らば日蓮の正統たる

◎興門流の三寶式

とは何ぞや。云く本果脱益の日には釋迦佛と法華經と多寶如來。又は四菩薩を以て佛法僧に配し之を三寶尊と崇むるも。本因下種の今日にては蓮祖則釋尊にして報身智父なり。興尊は則ち多寶佛にして法身境母なり。此の境智によりて生れたる法子之を日目と云ふ。故に蓮興目の三聖は則ち釋迦多寶十方分身の表現なり。之れ末法應時の三寶なりと云ふ論者もあり。此等は最も奇拔にして怪拔なる者か。然れども興流大多數の法式は蓮祖佛寶。曼陀羅法寶。興師僧寶。と云ふ三寶式に一定せるものゝ如し。但し此は四百年來の事にして最古のものには非さるなり。其れ蓮祖は唯一本佛なれば佛寶なり。大曼陀羅は聖祖當身の大事たる心法妙なれば唯一の法寶たること明白なり。而して興師は本門弘通の大導師なれば唯一僧寶なること誰れか異義あらむや。但し單稱顯本その他五教團に於ては大に異義あるべし。此義に異論なき時は日蓮門下九教團統合成立の發軫なり。蓋し大正百八十

年後の事なるべし其れ迄は喧々囂々。侃々諤々。憒々鬧々。乃至わつしよ〳〵〳〵〳〵の時代なるべし。故に云はく鬪諍言訟。白法隱沒。こされば法華經の第十五章には大衆の憒鬧を捨てゝ所說の多きを樂はざるものは本化の菩薩なりと勸誡せられたり統合問題よ冷靜に活動せよ汝が志念力堅固なれ其心無所畏なれと念するもの豈に啻に吾徒のみならむや……閑話休題……日蓮正宗及本門宗に於ける三寶式は諒に最善の法式なれども猶ほ或は謂ふ所の配當法門の誹りなからむや此は既に佛陀の禁戒たる別體三寶論に陷ゐるなきか世界最終の文明的宗教。人類最後の大光明を發揮すべき天壤無窮の大日蓮宗の法式として　惜哉未だ純理想的の實現にあらずと斷ぜざるを得ず吾人は

◎一體三寶論の信念

に安住せさるべからず。予は此の不動信を獲てより既に拾有八年なり此れ教學の恩師故日海上人の賜なり曾つて神道史傳を繙けば書中云へることあり。三神器は

神道の肝心。王法の樞機なり乃至三種の神器は一心を表せり。故に天に在ては日月星辰。人に在ては鏡璽劍なり。この三則ち一なり星月の二光は太陽の光明を資つて自家の光輝を發揚するにあらずや。三光の中に太陽は主體なり。三神器の中にも內侍所の寶鏡は中心なり。神璽寶劍は其中に在りと視此寶鏡、猶當視吾、の二句八字は蓋し。神道の宗趣と云べし。天下の神祠みな中央寶殿の前に神鏡を奉安するものは又たこれ一心如鏡、三種一体の信念より來るか

日神位を天孫に讓り玉ふや神勅あり云はく。此の豐葦原の瑞穗の國は吾が子孫の王たるべきの地なり皇孫往て治むべし寶祚の隆なること天壤と窮り有ることなけむ。於戲これ帝國固有の法華經主義なり撰時鈔音義口傳等能〳〵感讀せよ日本國所說の妙法華。正法華。の何物なるや彷彿推尋せらるべし乃ち知る

◎三大秘法卽一大秘法

なることを高祖の聖判を拜するに或は此の三の大事と云ひ、若くば此三大秘法と稱し、或は閻浮第一の本尊とこの玉ふ、或時は亦た此の一大事の秘法と判せり、要するに開合の異なるのみ、本尊抄 南條抄 太田抄 三大抄 報恩 取要 の両抄等これなり、夫れ本門の題目とは御本尊の尊號なり、本門の戒壇とは御本尊奉安の道場なり、果して然らは三大秘法其中心は本門の本尊なり、之を開けば八萬法藏ともなりぬべし、之を卷けば唯一の本門本尊に歸納せらるべし、三大秘法卽一大秘法にあらずや、吾が開山上人も三法妙中佛法妙中心の主義なれは、三寶一体說なること推して知るべきなり、あゝ要中要の修行を企つる吾が本因妙宗の徒、豈に別體三寶てふ形式に囚はれて可ならむや、但し大曼陀羅は一大法寶蓮、祖は唯一佛寶、興師は絕對の僧寶にて在すこと深く信すべきなり、然りと雖其化儀を强ゆるか如きは、是れ亦た一種の造佛論を勸進するものにあらすや、大凡聖教の中に

◎本尊式ありて三寶式なし

何となれば本尊則ち三寶にして、本尊の外に別に三寶の存するに非ざれはなり、

本尊式ありて三寶式なし

先づ三重の三寶あることを知るべし、通佛教に於ては別体三寶を説明すること、心地觀經の如し、四恩抄に之を細釋し三寶の鴻恩を訓へ玉ふ往て見るべし、法華經の迹門は三寶の互具を論せり、故に爾前の歴別三寶に撰んで之を圓融の三寶と稱す、唯た本門の意は絶對に一体三寶説なり、從つて壽量品の流通たる涅槃經も一向に三寶一体の教義なり、眞言見聞抄に云く佛を謗り僧を謗る之を謗法と云ふ、三寶は一體なるが故なり是は涅槃經の明文なりと、あゝ滔々たる教界の別体三寶論者をして顔色ながらしむる者は、其れこの聖訓か、悲かな學佛の徒

◎後世私に義を立てゝ

畧本尊廣本尊等の造佛宗は全盛を極めたり、蓮興目の三聖を三身に配し、三佛に擬する等の三寶説さへも現はれたり、進歩せる思想の表現と雖本經禮判の本旨に背く以上は、謗佛謗僧たるを免かれず、相似の謗法あり事相の謗法あり與同の謗法あり、三約謗離、國土成佛の佳春は知らず何れの時ぞ……、讀誦法華用心抄に云はく、正しく此經を見奉れば則ち釋迦多寶十方分身の佛を見奉るなり、加之三世諸佛權實の法、十方衆僧をも見奉るなり、此經は三寶一体の故なりと、三寶式論者以て如何となす、何はさて置き

◎壽量品に現はれたる明文

を拜すべし、偈の文に是の諸の罪の衆生は惡業の因緣を以て阿僧祇劫を過れども三寶の御名を聞かすと説かれたり。夫れ三寶名とは本地三佛の寶號なること聖判の如し。法寶は法身なり佛寶は報身なり僧寶は應身なり。此の三身則一身なる之を唯一本佛と申奉る。その寶號を南無妙法蓮華經と云ふ。故に妙法華經に云はく法華の御名を受け持つ者その福德量かるべからずと。正法華經には法華の名號を宣持する者その功德計るべからずと説たり。あゝこれ我等が行住坐臥、若くは園の中にも若しは林の中にも南無妙法蓮華經南無日蓮大聖人と唱ふべしと云ふ明文なり、初心成佛抄撰時抄信眼を開てよくゝゝ感讀すべきなり。既に名體不二の本尊

なり人法體一の本尊にて在ます一體三寶の說誰れか信服隨從せざらんや。

◎新堂を開山堂と改奠

すべしとは先師日海上人の御理想なり。吾人は至極の妙案と信聽せざるを得ず。宜しく批難百出の新堂をば局面展開。開山堂となすと同時に。布教講習所たらしめ時々開放して大講演會場にも宛つべし。教學の隆盛を計り傳導の機關に資すること未だ之より善きはなし。蓋し折伏の大導師日尊上人に忠なる所以の最善を盡すものと謂ふべし。是れ亦た猊下の英斷を期待して止まざるもの〻一なり。

◎聲ばかり大なる統合問題

大聲は俚耳に入らずとか下士は道を聞て大に笑ふなど〻頗る高く留まつた處。これ老聃のすね方なるか昨年の十一月以來聖祖門下統合事業なるもの起れり。聲は如何にも大なり未だ響のなきを奈何せむ。徒に俚耳に入らざるのみならず都耳にも邑耳にも馬耳にも兎耳にも亦た入らざるもの〻如し。之を道路に聽けば則ち云はく是れ牛耳を執るもの〻罪なりと。其れ然り豈に夫れ然らむや。統合の宣言統合の交渉如何に善美を盡すと雖も。最も神聖なるべき日興門流の諸山に一大塹濠のあるありて。幾度宗會を開くとも朝令暮改の決議となり。朝四暮三の宗綱信條にては、所謂善につけ惡につけ、地獄の業たるべきものなり。

要山客殿は古來方丈佛檀とか境智五大の表事など稱し來れども。是亦た改奠の要あり。此機を逸せず斷行あらむことを祈る。宜しく中央正本尊の御前に大聖祖を奉安し。其の右方は興尊左方は目師を勸請し。以て吾が興門共通の師資血脈を表現すべし。是れ永久に禍根を絶つものにして亦た最善の一策なるなからむや。

◎佛寶中心の三寶

本佛本法本化とは近來各教團の巨頭。異口同音の稱呼なり。何れの義虎龍象も殆んど轍を同ふせり。而して其多くは吾が興師門下の最高教判によりて啓發せられ

たること疑なし。……大抵權實判たる依法不依人、寶輕法重、身輕法重、などの文を盾として法勝人劣の法本尊を說けども。未だ人勝法劣人法體一等の深旨は曉了せざるものゝ如し。……死せる宗學者。守文の暗徒は乃ち云はく。本法本佛本化と次第すべきなり。某々等は既に出發點を誤れり何となれば本法はこれ三寶の中心にして。上求菩提の第一歩なり諸佛所師なり佛母實相なりと。あゝ此等は唯だ約智約境の權實判を知れるのみ未た本迹最高の敎判たる種が家の約身約位の法門を窺はざるが故なり……愚盲の法師は乃ち云はく佛法僧の三寶と次第すること。是れ音便に從ふのみ古來の習慣なるか。實には法勝人劣の定義なれば法佛僧と次第すべきなりと。嗟これ何と言ふことぞや。文福茶釜に毛が生へた。坊さん袴を穿て來たと云ふが如く三寶の次第を以て語呂合せの如く意得たるか。此等の徒は先づ老子の三寶たる慈儉退、孟子の三寶たる土地人民政治あたりより研究すべきなり。先儒錦城先生は國には鐵砲。家には女房。心には佛法。と云へり此等の次第は則ち如何呵呵として拍手大笑せざらむや。先輩曾て聽三寶鳥の詩あり云はく。無情の彼も亦た時世を知るか……佛法僧の中に僧を呼ばずとあゝ警世の名句味ある哉。生ける僧寶たる宗門の徒豈に猛省せざるべけむや。外典猶ほ云はく堯舜の道は則ち孔子之道なり。堯の服を服し堯の言を誦し堯の行ひを行ふ者是れ堯なりと。本佛の衣を絡ひ本佛の敎を宣べ本佛の行證を現はし玉ふ宗祖豈に久遠本因の本佛にあらずや。宋の大儒朱晦菴は云ふ

◎道卽ち孔子孔子則ち道

なり。人能く道を弘む道の人を弘むるに非すと秦漢以前の大儒皆既に云はく道や者聖人の制作なりと。夫れ人法互顯の所に人法の一體を信すべし。人法體一と云へばとて顰蹙謗法の罪科を犯すことを休めよこれ大石寛師の新義にあらず知らずや高祖大聖以來の古義なることを。興向兩記を精讀せよ文證顯然理證赫々たり。僧空海が秘藏寶鑰に人法一體不得別異とあればとて吾門の人法と霄壤も啻ならざるなり妙樂の所謂法華の人法永く諸經に異るとは是なり。當さに知るべし法勝人

劣の立義は理なり迹なり哲學的なり人勝法劣則ち人法體一の義立は事觀なり本門の意なり宗教的神髓なり。……一念三千と云ふこと既に人法體一の表幟ならずや。一念は人なり三千は法なり人法の活躍せる之を事行の一念三千と云ふか撰時抄三度の高名を擧げて活釋し玉ふが如し嗚呼人法各別は教相の法門也人法體一とは文底觀心の實義なり讀者乞ふ惑ふこと莫れ。

◎三寶の別說は佛陀の禁戒

なり故に常忍抄に大經を引て云はく。若し三寶に於て異想を修する者は當さに知るべし。此輩淸淨の三歸依處なし終に三乘の果を證すること能はずと。是れ正さしく自我偈の不聞三寶名を顯說せる者なりと文。あゝ本經祖判明かに三寶一體を說かれたり。涅槃經の若於三寶、修異想者、の二句は眞に別體三寶論者か頂門の一針にあらずや。宜しく這般金口の法水を灑いで汝が熱腦を淸凉ならしむべし。亮に佛說の如んば二乘の證果さへ覺束なし。焉んぞ無上菩提の道に入ることを得んや。彼の三寶を護るもの轉た更らに三寶を破滅すとは仁王經の懸記なり。此金文、此豫言に接するとき孰れか竦然として容ちを改めざる者あらむや。……開目抄に云く聖人の世には法華經の實義顯はるべし愚人の世には正法の理隱るゝ心得べしと。本佛日蓮聖人の出現に依りて本法本僧俱に本有の靈山たる大日本國に利出せりと云ふべし。若し本地上行の末法出現なくんば正法正僧は將た何れの處にか之を求めんや。吾徒は傳道家たらむよりは先つ須らく求道家たることを期せざるべからず

◎法は藥物佛は醫師

の如し醫師あるが故に藥物あり醫師なくんば藥物あることなしと。是れ法華經の流通的論釋たる大論の文なり。例せは東洋には神農氏現はれて始めて醫藥ありと云ふが如し。龍樹菩薩の言佛寶爲本の說にあらずや。久遠の本佛は一切世間の治道覺道に於ける出發點なること亦明かなりと云ふべし。古來佛法僧の三寶と稱す

ること豈に所以なからむや。底事ぞ高野の山比叡の峯ブツポウソウと鳴かずして單に佛法々々とのみ鳴ける三寶鳥ありと云ふ。あゝこれ何等の諷刺ぞや。傳教大師云はく三學俱傳。名けて妙法と云ふ三寶の一體なること誰れか之を信ぜざらむや。故に云はく

◎要山客殿の法式は非なり

先づ中央を曼陀羅のみとして左右に蓮興二尊を安くこと是れ一法二尊の三寶式より脱胎換骨せるものが目師尊師を對向せしむるが如きは靈山會上地涌の對向より型を取りしものにや。之を境智五大尊などと稱するに至ては技巧の精妙を極めたりと云ふべし。何時頃よりの化儀なるや何人の考案なるや調査の暇を有せざれども。吾が山客殿の法式は本門本尊の大聖人を脇士視するものなれは。高祖を輕賤し奉るに似て三寶一體の信心を害すること甚し。恐くは聖意に非らずと斷せざるを得ず。猶別體三寶論の欠陷を指摘せば宗祖を單に佛寶の德のみ在ますかの如くにして。法僧の二德缺けたりと爲すものゝ如し。是れ惡敬の優なるもの焉んぞ亡國の緣たらざらむや。況んや大曼陀羅は法寶のみの德にして佛僧の二德缺げたりと云はんか。是れ亦た妙法本尊を破壞するものに非ずや。果して然らば三寶式なるものは文證も理證もなき魔說と極言するも。奪釋上の權威なれば又止むことを得ざるものあり。教行抄に云爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず鬼畜なんどと降しても何の過あらむやとは是なり。聖人一を抱いて天下の式と爲ると老夫子は云へり。大聖祖は唯一本法を抱いて日本國の柱として閻浮第一の本尊と現はれ玉ふこと。吾人等類の弟子。順緣の信者として豈に信知すべからざらむや。

◎大義名分の沒却

と云ふことを以て宗祖本佛論を難ずること古今人皆一轍なり。今此三界の經文は釋尊に限ると思ひ我亦爲世父とは釋迦佛の事とのみ執するが故なり。それ國家ありて然る後君主あるこれ萬國の常態なり。君主ありて然る後ち國家の建設せらる

ものは。星羅の萬邦獨り帝國あるのみ。彼は國君なり。此は君國なり。國體國性國相に至るまで先天的に其撰を異にするを以て。天佑常に皇國にあり世に隆汚なきにあらざれども。正氣時に光を放ち萬世一系の寶祚は宇内に獨歩する所以の皇室中心の勅敎あればなりあゝ宗祖中心の敎義に迷ひ。大聖人を淺解して恬然たるものは未だ王佛冥合の何たるをも意識せざるものか。結局本化出現の一大事因緣をして平々凡々の結論を告げしむるに至らむ。恐るべきは淺識謗法なり愼しむべきは不解謗法ならずや。

論者云ふ興門の宗祖本佛論なるものは恐るべき危險思想なり。大逆無道。天理を滅し人道を破る。未だ此論よりも甚しきはなし何ぞや日蓮は釋迦の忠臣孝子なり。最も人倫を重んぜり。然るに今ま本佛論者は釋尊を以て日蓮の從者となさんとす。是れ將門趙高の事を蓮祖に誣ゆるものに非らずや。聖祖豈に此非禮を享け玉はんやと。昧者達せず附和雷同するを以て能事となす悲哉。先師云はくあゝ宗祖を解するこゝの淺き者よ、汝等何ぞ釋迦多寶をして純友王莽が如くならしむるや迹佛の二尊に執して本佛の聖祖を弑するこゝを休めよと。

論者云く本尊は所具の體を顯はし聖祖は能具の體を顯はし玉ふとならば涌出の菩薩は已心の釋尊の眷屬なり何ぞ脇士と云ふ義あらむやと。先師云はく垂迹の地涌は釋尊の脇士。釋尊は本佛の脇士なること報恩抄の文に明なり汝何ぞ顚倒するや。

論者云はく。中尊と二佛四士には必らず南無の二字を置き玉へり。南無とは歸命度我と譯せりされば宗祖も已心の妙法と二佛四士に歸命し玉ふこと明かなり。何ぞ脇士には釋迦多寶等と云ふが如き下尅上あらむや。先師云はく。汝の愚や又度すべからざるか。房州妙本寺の靈寶たる萬年救護の本尊を拜せよ。南無文珠南無八幡南無天台等すべて南無の二字を冠らせ玉ふ。汝が言の如んば大聖祖は八幡や天台にも劣れりと云ふべきか呵々。彼の天照八幡は掌を合せて地上に伏し梵釋左右に侍し日月前後を照臨すかゝる日蓮を用ゐるとも惡しく敬すれば國亡ぶべしとの妙判は頗る大慢の所爲にして大逆無道、天理人道に悖戻すと云ふべきや如何。加之ならず地上に俯伏せる天照八幡に歸命頂禮し玉ふ宗祖は狂氣の沙汰と奉申べ

きかあゝ

夫れ我祖の歸命し玉ふ天照太神地に伏して宗祖を禮拜し玉へり。之を以て推せよ南無釋迦南無多寶と歸命し玉ふとも。此兩尊却て迹佛迹土を表し大地の上に處して。南無日蓮大聖人と瞻仰尊顏。恭敬供養し玉ふこと多辯を待たざるなり。「日蓮が頭べには大覺世尊替らせ玉へり」……「日蓮を龍の口の刑場に引き据へしは釋迦多寶十方の諸佛の頸びを切らんとする者なり」何ぞ直截簡明の妙判に接して信仰の寸心を改めざるや宗祖本佛論！例せば世界强大國の帝王等が日東帝國の君主陛下……それは嶋帝國の小君主なれども絶對の神權、偉大なる稜威は彼等諸大强國の王者をして心的伏從せしめ玉ふが如し頑冥なる造佛の徒よ汝等は先帝陛下が明治十四年三月十四日南殿に出御し天地神明に誓ふて五條の誓文を發せられし聖旨を解せりや。德川齊昭の獻せし地球儀を高御座の下に置き卽位の大典を擧行せられし儀式をも。狂氣の沙汰と笑ひ誇大妄想の所爲と罵倒するならむ。大逆無道危險思想とは夫れ非宗祖本佛の徒か。

吾れ聞く個人を本位とするとき宗教は寧ろ方便にして個人の歸着は國家に在り。國家を本位とするとき個人はその方便にして國家の歸着點は世界に在り。世界を本位とする時。國家は其方便にして世界の歸着點は法界に在り。法界を本位とするとき世界はその方便にして法界の歸着點は本佛論である……とあゝ宗祖本佛論とは擧國一致の一大研究問題にあらずや先師日住上人屢々云へり日輪日蓮御一體の妙法なりと吾人常に謂ひらく世界に於ける思想界の大照應として法華經の說法と我國神代の神話と相接續して人生的大脚本を實現するの時期あるべしと。鳴呼一同に他事を捨すてゝ南無妙法蓮華經と唱ふる時孚に大義名分と云ふことを知るならむ例せば鎌倉開府以來八百五十有餘年間日本國民の大半は大義名分を沒却せしが如し釋迦本佛論者の心遂惺悟はあゝ何れの時ならむあゝ何れの時ならむ、

◎下種本尊章第三

蓮祖大聖人とは經釋の面に顯然たる福過十號の生身佛なり、彼の冥想的印度佛敎

や註釋的支那佛教に沒頭せる者は終に之を悟らざるか、……人間史上曾つて類例なき人格の標準を現はし長へに人類の儀表たる者は聖祖なり、是れ大日本の魂魄にして世界の救主なり釋尊の大、基督の大、をも包容せるかの如き絶對的偉大なる凡夫本位の佛陀なり、之れを久遠の本佛と云ふ可なり、之を下種の本尊と尊奉する亦可なり、此章に於て活潑々地、事觀の妙法を知るべし具體的佛教、日本國所立の大法、種脫の大法門を信解すべし、

文句記九云く勝を以て本を表す故に百歲と云ふ、既に若佛及佛と云ふ則ち彌勒の不知を顯はす乃至不二の身を現す故に本地と云ふと嗟肝に銘する哉、內鑑冷然たるこの活釋……。釋迦上行互爲主伴の說、三聖一體の論あに左京日教師が私情ならむや、花嚴既に大小釋迦互爲主伴の說あり本化の伏線たること知るべきのみ、

啓運澄師云はく若佛及佛とは唯佛與佛の意なりとあゝ宿緣薰發の徒は此の如き者あり吾儕豈に孳々として信解の向上を祈らずして可ならむや百六箇の跋に本佛本化乃能究盡と云へる者と文句の九に現不二身故云本地と釋する者苟に門下の明鏡と云ふべし

◎種本脫迹の教義

とは何ぞや是れ興門流の羅針盤なり、是れ生死海中の燈明臺なり、此四字を知る時は本化の教觀に於けるや其れ之を掌に視るか如きか、天台大師が三種教相を洗練したるものは之れ吾家の權實本迹種脫以上三重の教相なり故に禀權抄に云く日蓮が法門は第三の法門なりと當さに知るべし第三の法門とは種脫の相傳なり、先づ第二の法門より語らむ、天台の化導の始終師弟の遠近を一括したる者これ吾家の本迹判なり、玄文第七に本迹は約身約位なりと、蓋し久遠名字卽の御身と位とに依りて判せらるゝか常に云ふ本迹の教判とは大に殊なれるが如し。此本迹判に依れば本迹とは本佛迹佛より起る名目にして本地佛の說法はすべて本門の法門、垂迹佛の說法は悉く迹門の法門なるべし世の本迹を說くもの徒に一經三段二經六段など談するも此は經文の爭論にして未だ本迹の實體にあらざるなりかの經卷相

承と稱し一部修行の本迹勝劣と立つるが如き顯本日什師、本妙日眞師の所論は甚だ不徹底にあらずや……昔時梁上の君子相集まり夜會を催ふす、宴酣なるや互ひに其人格を非議して云はく、某は義なり某は不義なりと相爭ふて曉に到ると……あゝ其自體本性すでに梁上の君子なり、亦た何の甲乙か之れ有んや、彼れ若し不仁の理を解せんか何ぞ速に盜賊をやめて正業に服せざるや呵々、既に本迹の勝劣を語りつゝ、一部讀誦の行を許さむか勝劣を糺明するの寧ろ徒勞に屬せずや、本迹の相違は天地の如し、種脫の相異も亦た水火の違目なからむや、之れを混亂し若くは調和を計らむが爲に苦心せられし前賢も往々之れあり、然れども此は實に不可能の事なり、其れ種脫の混淆は則ち本迹の一致にして錯謬千萬と云ふべし、

百六箇の流通文に云はく右此血脈は本迹勝劣其の數

◎一百六箇之を註す

數量に就て表事ある事を覺知すべしと、日好師云はく一聖及び六老僧を表するか、

又曰はく第三の法門とは六老第三日興に種脫の相傳ありしが故なりと蓋し義釋當らずと雖亦た遠からざるか、吾れ之れを先師に聞く前五十一條は迹中の本迹判なり、後五十一條は本中の本迹判なり、但だ本地の四一は唯一絕對なるが故に之を根本として一百六箇に口決し玉へり之れを知らずして焉くんぞ種脫を悟らむやと、予れ聞き終て茫然たること多時、爾來十年殆んど望洋の浩歎なき能はず、智者大師云はく名字觀行は生を隔てゝ則ち忘る、若し善知識に値へば宿善還て生ずと、吾れ此の玄文に勵まされ爾來數年間又古賢を尙友し遺文を拜誦して秋毫の造詣ありしかと思惟せり、偶々日蓮門下統合の佳春に際會し貫主日濟師の御諮問を辱ふす、あゝ盲蛇の誹りを顧みず欣然として筆を呵するに至る、是れ員に法門審議會委員たるの光榮を有するか故なり、今や吾が本末は本會の爲めに多大の犧牲を拂はざるべからず、理事者の緊褌一番はそれ斯時にあるか、

◎文上文底とは何ぞや

云はく文上とは迹門の法門なり文底とは本門の法門なり、如來秘密の文底とか、然我實成の文底とか、非如非異の文底とか、我本行菩薩の文底とか、是好良藥の文底とか、題號妙法の文底なりなどと爭論せる間は到底文底の說を會する能はざるなり、今試みに予が信得及せる所を披瀝して猊下の垂示を待たむ、

玄義七に善德如來を始めとして神力品の十方諸佛を悉く餘佛と判せり、是れ迹佛の意なり豈にたゞ是れに止まらむや靈山の釋尊と雖も久遠實成の佛と稱するも第二番以後に於て我實成佛の宣言あるものは皆なこれ餘佛と申奉るべし、夫れ文上の意は久遠本果を以て本地となすか故に是れ餘佛の攝なり何となれば本果は實に是れ垂迹にして萬影中の一影なり更らに餘佛あるべきや知るべきのみ。

若し夫れ文底の意は久遠元初を以て本地と爲す、唯一佛にして餘佛あることなし、本地自受用報身は天の一月の如く尼狗類樹の一根の如し、あらゆる垂迹化他の功は皆元初の一佛に歸趣すること、惣勘文鈔の聖判赫々として惑ひあることなし、文に云はく卽座開悟の後化他の爲に世世番々に成道在在處々に八相作佛すと云云

……本因妙抄に脫益を文上となし理上の法相理の一念三千と奪釋を與へ玉ひ、種益をば文底と名けたり名字の妙法を餘行に渡さず直達正觀するもの事行の一念三千なりと判せらる深かく信を取るべきものなり、

◎雖脫在現具騰本種

とは荆溪大師の活釋にして直截簡明に能く本迹種脫の大綱を知らしめ玉ふ、訣に吾が門下の明鏡にして信行觀心の眉目と云ふべし、予は此二句八字を以て畧三大部と稱せんとす允なる哉妙法本尊を說明して餘蘊なしと云へし、四河の海に入るが如く衆星の北辰に向ふが如く迹中の諸佛菩薩は俱に久遠元初の本佛本法に拱つて躍進し玉ふの謂ひか、當さに知るべし本門本尊は體なり左右の十界は用なることを、ああ本迹既に勝劣あり種脫何ぞ勝劣なからむや既に勝劣なり豈に取捨なか

るべけむや、聖祖この種天脱地の中間に於て

◎萬代不易の銅標を樹て

云はく、下種佛は天月なり脱佛は池月なり不識天月但觀池月とは是なりと百六箇鈔往見……本因妙抄に云三には名體俱實……本門究竟常住なり、四には名體不思議……是れ觀心直達の南無妙法蓮華經なり湛然の云く雖脱在現具騰本種と文、又曰一心法界の教とは壽量品の文底の法門自受用身眞實の本門、久遠一念の南無妙法蓮華經……具騰本種の勝劣是なり、宗祖云はく壽量品も文は現量なれども上行所傳の本因妙を唱へ顯はして後は唯だ久遠の教相にして成佛の肝要なる觀心には非ず、と已上種脱の教判極めて鮮明ならずや、大凡脱迹教の圏内に沒頭せる間は、終生、東觸西觸の牛たるを免かれず、況んや學文未錬の後生をや、愚案ずるに種本脱迹の教義を最も赤裸々に顯說すること兩卷血脈書に若くはなし流石に古來傳法書として門流第一の秘書と尊信せらるゝこと亶に故なきにあらずされば啓蒙講師、

常樂院經師、往々本因妙抄を引證せり、就中顯本宗の豪傑日經上人の本迹勝劣抄には富士日興の立義若し邪義ならば宗祖何ぞ導師を命じ兩血脈書など授與し玉はんやと云へりかゝる信解を有せる經師何故に興師門下に歸正せざるや、他なし慶長の當時既に本宗各山の學閥學派紛々擾々たるもの有りしに慊らずして或從智識或從經卷の釋を信憑し乃ち藉を日什門下に置き、彼が如き大折伏をなし玉ふが欽慕し渴仰せざるべけむや、後世貫道院日誠、嘉傳院日悅、葦名日周、同日善等の俊髦吾が要法門下へ歸化せしもの亦た淵源ありと云ふべし、あゝ今や然らず却て他宗の潤色をなし既に心を移して未だ身を移さゞるもの往々なきにしもあらず噫何等の凋落ぞや慷慨して而して慨すべき哉

◎諸山惣代妙覺寺日琮

と云へば寛政法亂の當時一味徒黨吾山を迫害せし京都十五山中の猛將なり、彼れ常に傲言して云はく要法寺日住動もすれば本因妙抄を引證すれども此方には其れ

以上の物を所持せりと吾が守眞院住師之を駁して云はく、汝本因妙以上の法ありと云ふか是れ外道の魔說にあらずやと、日琮則ち口則閉塞して赧然たりと云ふ、今や吾門内にも第二の日琮等現はれむとす危險思想なるかな、先づ之を根絶せざるべからず。

◎十五山の犬！僧寶洲

彼は要山良師の弟子にして住師の薫陶を受けたる者なり、然るに法亂前數月大恩師に背き一致僧となれり、而して本滿日進、本隆日東、妙覺日琮、等と共に奉行所に讒訴して云はく、本山要法寺は日良以後佛像を水火に投し新義異流を企てゝ愚婦頑夫を瞞過すること猶ほ一向宗のそれの如しと、寶洲か一言は當年の大悲劇を演ずるに至るか、あゝ要山本末を動亂せしむるもの前後八年間、咄此の狗犬の僧與つて力ありと云ぶべし、如今吾山第二の寶洲なきにしもあらず先づ破城漢の撲滅に勉めざるべからず。

◎要山佛像撤廢の時代

は住師記によれば末寺に於ては良師法令以前廿七代日奠師の時より宗祖の御影の外佛像は一切之れなしと、眞守院青年の御時東西諸州へ巡教せられしに一宇も佛像あることなしと、果然現今に至る迄百八十年間本堂則ち正境寶殿には人法一體、下種本佛たる大聖人を以て本尊の主體と尊信すること疑なきなり、彼の三時弘經の通軌を逸せるの徒、四重興廢の定判を忘れたるの輩、美的假象論に囚はれたる似て非なる審美學者は、書ても造てもとか廣布の曉まではなどと稱して、妥協苟合、阿諛迎合の裡に一生を瞞過せんとするに至る噫。

一介の小衲この大膽なる斷案を爲す豈に現證なくして可ならむや、本章の最終に單刀直入現證的鋭鋒を提けて肉迫一番せむか、恰かも迅雷風烈耳を掩ふに暇あらざるか如けむ、凡そ這回御諮問に相成りし三題、云く造不造論、云はく三寶式論云はく種脫相對論、以上三題は殆んど脈絡貫通せる一大命題にして三題則一題と

云ふべし之を文格にて云はんか常山の蛇勢これなり、夫れ頭を叩けば尾動き尾を叩けば首動き背を叩けば首尾共に躍動せむか、此稿咄嗟の間に成る殆んど一氣呵成の作、隨感漫錄の類に過きずされば草蛇灰線の技巧的文章を用ることは其志にあらざるなり、唯だ過去現在の先賢に對し知恩報恩の爲め護法の萬一に資せんと欲するのみ讀者之を亮せよ

◎本因妙と本果妙

久遠元初直行本迹の文に云はく、名字本因妙は本種なれば本門なり、本果妙は餘行に渡る故に本の上の迹なり、久遠釋尊の口唱を今日蓮直に唱ふる也と、又云はく久遠の本師は妙法なり本有實成の釋迦多寶は迹なりと本因本果、種本脫迹の法門豈に了々乎ならずや……玄文第七に迹を拂ふて本を顯はす則ち本因妙を知ると、あゝ本果の發迹顯本にあらざるや、知るべきのみ、高祖迹本非迹の玄文を活釋しての玉はく今日の本果妙これなりと、當さに知るべし一法二尊の三寶式は本果妙脫迹的の法式なることを。

持地論に云はく一佛の境界に二尊の號なし、大千界唯一の釋迦牟尼佛なりと、一法二尊の本堂式にては眞言亡國の法門も亦た少々憚かりあらずや、彼の不空三藏が觀智の儀軌も一法二尊に類せずや、二尊四士四天二明王などの勸請をなせる吾山の新堂は雜亂勸請にあらずして何ぞ噫、頃者予が信徒某來詣ず談偶々新堂の儀式に及ぶや、彼れは淚を揮ふて云はく吾れ五十年來要法寺釋迦堂に賽詣せしことなし、該堂を一見するに宛然他宗の本尊に向ふが如き感あり、されば曾て觀心唱題の念も起らず、加之ならず何と回向文を言上すべきをも知らざるなり、時々要山の說法を拜聽するも宗意安心の確定義をも聞からざるなりと噫、日將試みに回向文四章を授けて云はく。

本堂は正境寶殿なれば左の如く觀心唱題すべきか、南無本門壽量文底、深秘直達正觀、不渡餘行、本地難思、境智冥合、事の一念三千人法一如の大御本尊御感應御利益あらしめ給へ……。

南無久遠元初自受用報身如來の尊形、主師親三德、有緣深厚、本因妙の敎主南無日蓮大聖人、三世常住の御利益、大慈大悲大恩報謝の爲め……。

新堂は垂迹堂なれば左の如く觀心唱題すべきか

南無下種本尊の脇士、久遠實成の釋迦牟尼佛、證明法華の多寶如來、上行無邊行淨行安立行等地涌千界の大菩薩、普賢文殊彌勒藥王等迹化他方の大菩薩、身子目連迦葉阿難等新得記の諸大聲聞各本法守護令法久住なさしめ給へ……。

非但當時、獲大利益、後五百歲、遠沾妙道、末法之初、冥利不無、雖脫在現、具騰本種……と。

彼れ法悅歡喜して未曾有なりと合掌せり既にして云はく種本脫迹の觀心唱題は乃ち命を聞くことを得たり每朝の天拜は如何に申すべきや予云はく左の如く言上して唱題三轉する可ならむか。

南無久遠下種、本法守護の諸天善神、大梵天王帝釋天王、大日天子、大月天子、大明星天子、四大天王、八大龍王、堅牢地神等、別しては本朝守護の天照太神、正八幡宮、天神七代、地神五代等總じて大小の神祇御法樂の爲め……。と老優婆塞乃ち隨喜讃嘆して去る、嗚呼この老信士が懷疑的質問は吾山大多數緇素の通有か果して然らば速かに之れが善斷方法を講せずして可ならむや。

大正三年十一月のことなりき予が信女某來詣して云はく要山釋迦堂は之を祖父に聞く今より八十年前の新設なりと、則ち老舗にあらざるが故に彼の堂に禮拜するもの幾んど希なり、例せば岡崎の平安神宮の如きか、殊に怪しむべきは有れども無きが如き本寺の取扱これなり、從來隱顯出沒再三に及んだる佛像とも聞けり、さては該堂は一個の鎭守堂に過ぎるかと、吾れ之を聞て噴飯に堪へざるものあり、左右を顧みて他を言はんと欲すれども、而れども固より之を不聞に付するに忍びず通俗なる本迹の法門を說て理會せしめたり、此の兩話は則ちこれ天に口なく人をして言はしむる者か、業に既に此の天聲人語のあるあり、何爲れぞ迅かに此秘密堂を開放せざるや、否この奧藏を開顯せざるや、吾が本因下種の妙鑰を以て之を開せんか、何の難きことか之有らんや、

玄文第七に云く本迹非迹と、高祖の聖判に云はく末法今時本因妙の事なり、本因妙の外全く迹なきが故なりと乃ち知る本因妙は種益にして本果妙は脱益なることを、傳へ聞く本妙法華の開山日眞上人は、妙樂の釋に依り本因果種の法門を主張せらるるや勝劣各山の先賢往々其講筵に列せりと云ふ、吾山辰師の如きも其一人なり、然りと雖も晩に宗祖の下種本尊なることを記せらるゝに至る、蓋し相承門下の法主なればなり、吾人が造佛讀誦論に對して失敬する所以のもの此に在り、其れ吾山の相承や興尊直授金甌無缺の血脈なり、之を擁護せむが爲には諶に萬難を排して邁進せざるべからず、吾人は此意味に於て往々禮を先修に缺くことある亦だ止むことを得ざる者あり、偏へに佛祖の照覽を感孚し奉るのみ。

◎絶待妙と相待妙

下種二妙實行本迹の文に云く、日蓮は脱の二妙を迹とし種の二妙を本と定む、されば相待は迹なり絶待は本なりと、……一代大意抄に云はく此經唯だ二妙を論すと、相待絶待の二妙是なり一は附文の邊にして他は元意の重なり、一は脱にして他は種なること宗祖の自說なり、絶待の正境たる大聖人を忘れて一山二主一國二王主義にさも似たる脱迹の三寶式の如きは早く適時の處斷を講せざるべけんや願くば吾山本末の大衆全員委員となり此快擧を可決し

◎尊門の維新を斷行

して一新紀元を開闢せんか、是れ聖祖門下統合事業の伴食僧正たるに勝ること萬々ならん、凡そ下種本尊論に就ての主要判とも申奉るべきものは

兩卷血脈抄、開目抄、撰時抄、報恩抄、本尊抄（問答抄 觀心抄）三大秘法抄、日興記、日向記、諸法實相抄、諫曉八幡抄、教機時國鈔其他拾數百卷なるべし吾人は此機會を以て言論にまれ文章にまれ何人にても論戰を希望するものなり、時と所とを論せざれども成るべく數十百人の聽衆を許可しての對決を可とす、但し筆戰は一兩月の間之を謝絶す動もすれば弱音を吐き其信仰を二三にするの徒は、始より予が敵

手どするに足らざるなり。

◎諫暁八幡抄の内容

を見よ種本脱迹の勝劣最も精密にして明確なりと云ふべし、如何に脱迹城の驍將二刀流の豪傑と雖も速に下種法王の軍門に降らざるを得ず。

一、脱益の教相　一、下種教相
一、天竺二月氏國　一、扶桑日本國
一、佛陀の教　一、大聖人の教
一、在世の時　一、末法の時
一、正宗分　一、流通分
一、當機衆　一、結縁衆
一、本己有善　一、本末有善
一、西の方　一、東の方

一、月の光　一、日の光
一、印度教輸入の相　一、日本國教還入の瑞相
一、夜　間　一、白　晝
一、僅々八年間　一、後五百歳照闇の瑞相
一、逆謗不治の佛陀　一、逆謗皆治の大聖人
一、天下泰平の時　一、軍國多事の時

日本神道史に云はく大千界の根元なり故に日本國と云ふ宇宙の宗廟なれば大日本と尊稱す云云、高祖の玉はく佛法を弘めんには必ず國を鑒(かんが)みて弘むべし彼の國に善かりし法なれば必す此國にも好かるべしと思ふべからずと乞ふ三省九思せよ

◎教機時國抄の内容

一、彼は一品二半此は題目の五字……教の前後明白也
一、彼は迹中脱機此は久遠の直機……機の前後明白也

一、彼は迹時なり此は本時なり……時の前後明白也

一、彼は靈山の迹土此は日本の本土……國の前後明白也

一、月の佛法自西日の佛法自東……流布前後明白也

夫れ前後とは勝劣の異名なり、徹頭徹尾、種本脱迹の教相觀心なること知るべし、凡そ宗教の五綱の中に於て國家と云ふことに最も着眼すべし本尊抄に云土の前後言ふ計りなしと悃に國家中心の教觀と云べし嗟前印度の東洋に於ける位置を見よ衰殘の亡國にして恰かも脱迹教の末路を見るが如し殷鑑遠からず註釋的佛教國の支那帝國の現狀今何如ぞや、高祖日向記に云はく大日本國は本國土妙なりと於戲無始以來本佛出世の國土とは其れ唯だ日東帝國なるか

くらき世の、人こそしらね、日の本は、
もとこの佛の、御國なりけり。（日海上人）

とこれ古今釋教の秀逸とも謂ふべきか、本化門下未だ之れ以上の聖調を拜せず、音義に云はく世界とは日本國なり蓋し日本的世界の聖意にあらずや、又曰はく本有の靈山とは日本國なりと嗚呼靈山一會は既に開散せり、八品所顯とは何等の囈語ぞや、佛は中道を好むか故に五天の中心摩訶提國に下生し玉ふ久遠以來刑戮行はれず不害國（摩阿陀國の譯名）に成道を爲す所以なりこの經說も今や方便假說たること事實に證せられたり星羅の萬邦ありと雖も唯日本國のみ渾圓球上の中心として六合昭臨八荒併包の一大稜威を發揚せり、本佛出世の國土は千古萬古大東日出の國を以て金剛寶座となすこと三世常恒不變の儀式なり故に此抄に云はく五鋼を解せざる者日本國の師とならば國家の滅亡期して待つべしと、若し夫れ此宣言此信念に疑義を挾まむとする者あらむか千萬人と雖も吾れ往かんあゝ千萬人と雖も吾れ邁かん

◎種佛脱佛の五大異目

概して脱迹家に於ては、本果の報身を以て久遠元初の本佛に擬し、以て造佛を鼓吹し訓蒙的に大悲を施設せらる、是れ未だ本意の法門にあらず、何となれば本果

の說法は全然今日の化儀に同じければなり、故に玄籤の七に云はく久遠に又四教ありと、或は云はく昔日既に已今を得たりと、文句一云唯だ本地の四佛皆これ本なりと、然れば則ち本果報身は亦たこれ應佛の域中を脫すること能はざるなり各教團大抵は此範疇にあり、血脈抄に云はく今日の本果從因至果は本の本果に劣ると此の勝劣判に迷ふの結果は本果下種說、本因本果下種說、本果報身論さては似て非なる從果向因說等頻々として現はれたり、先づ血脈抄の御文を解せん、等しくこれ應昇進なりと雖、所顯に從ふが故に勝劣あるなり、夫れ今日の本果は聖の因門を開き本の果門を顯はすが故に從因至果なり。

但だ本の本果は、迹の本果を開きて、本の本因を現はす故に從果向因と云ふ、吾祖の勝劣判ある所以のものは、今日の本果は迹因を開きて本果を顯はすが故に、所顯の本果も若し本因に對すれば猶これ本の上の迹なれば、今日の本果は劣るとの玉ふにあらずや惑ふべからず、夫れ既に本の本因を顯はすが故に、所顯の本因や獨一の本門なり、故に本の本果は勝ると云ふか、所顯の法門勝劣異なりと雖、

今日の本果は同じく之れ色相の佛、應昇進の自受用身なり、此處一見竹膜の異なるが如くにして而かも天地の相異なり、齊一變すれば則ち魯に至らむ魯一變すれば則ち道に至らむとは是なり、

高祖云はく予が法門は本果より本因を宗とす、第一百番の口決に云はく下種十妙實體本迹の文に日蓮は本因妙を以て本と爲し餘を迹となす、是れ眞實の本因本果なり云云……先師云はく文底とは久遠自行內證の本門なりと又云はく當流は種が家の三妙合論、不渡餘行の觀心なりとあゝ是一家言にあらず恐らくは御聖意に允諾するか、古人宗の字を訓して云はく尊なり主なりと果然法華宗と云はんか須からく大曼陀羅を以て本尊とすべし、日蓮宗と稱するものは聖祖の尊像を本尊壇上に奉安すること欵に其所を得たるものか……元初の報身と應昇進の如來に就ては百番の相對ありと雖も今五大異目を揭げて大綱を明にすべし、曰く本地と垂迹なり、曰く自行と化他なり曰く名字凡身と色相莊嚴となり、曰く人法體一と人法勝劣なり、曰く下種の敎主と脫益の化主なり、末法は之れ下種の時機なり宜しく

下種の佛を以て本尊とすべし聖祖の玉はく某は下種の法主なり又曰く日本國の柱なり閻浮第一の聖人なりと何ぞ惺めざるや何ぞ悟らざるや脱迹の流れに從ふて下りて反へることを忘るゝ莫れ終に爾ぢの國民性を喪亡するに至らん。

◎刹那成道と歴劫成道

觀心抄に云く一品二半は舍利弗等の爲に觀心なれども、我等凡夫の爲には教相なりと、夫れ在世の觀心は末法の教相なり、在世は正宗を面となし、滅後は流通を面とす、聖祖の御一代にも佐島四年は正宗にして、延山九年は流通の爲に意の法華經を顯說し玉ふが如し、彼の興向両記の如きは全然觀心の法門にして、種本脱迹の御談なること、両卷血脈と恰も符契の如し。

九十七番下種序正流通文底本迹の下に、應佛と天台とは正宗一品二半を本門と定む現文の勝劣なり、報佛と日蓮とは流通を本と定む文底の勝劣なりと、文に報佛とは元初の本佛にして内薫自悟一迷先達の本主にして聖祖の本時なり、愚案ずるに

尺尊の成道と本佛の成道とは天地の異目なり本佛の成道や之を刹那成道とも半偈の成道とも云ふ此に反して尺尊の成道は歴劫成道なり、破天荒の宣言、何人も喫驚するならむ、されど壽量品の現文は之を證して餘あり久修業所得、汝等有智者、勿於此生疑の文是也、此時に當りて須叟聞之、卽得究竟、是人於佛道、決定無有疑、得入無上道、速成就佛身、等の經文を引證し脱佛の刹那成道を證せんとすも、亦六菖十菊の迂愚と云ふべし、……法蓮抄に尺尊塵點劫の間修行して佛にならむと勵み玉ひしは何事ぞ孝養父母の事なりと判じ玉ふ又以て種脱勝劣の一斑を知るべし。

本尊口傳に云はく大曼陀羅は流通分なり、流通とは末法の事なりと、委細に此義を信知せんとならば、觀心抄の樞要法門たる五重三段の中に文底三段の法門を智識に就て習ふべし、宿善薫發の徒は自解佛乘することもありぬべし、止暇斷眠、下種大本尊の毫光に接觸することを祈るべし、嗚呼、本佛本法の功德勝能や皆是れ宗祖の知見身行に發現せられたり、是れ之を唯一絶待の聖境と云ふ去れば吾等が色心正依を擧げて宗祖の大慈願海に攝歸し法界圓融するにあらずんば又與に法花

門宗の信行觀心を語るに足らんや、

大凡天下の如何なる思想學見を判ずるにも本化大聖の知見を以て規矩準繩とせざる可らず、之を能判能開の本法と云ふ若し夫れ聖祖を離れて本佛本法を求めむか是木に緣りて魚を求むるよりも尙ほ甚しき者あり知らずんば有る可らず學ばずんばある可らず先づ萬事を抛ちて蓮祖の魂を感得し異體同心の大三昧に住すべし何をか異體同心三昧と云ふ曰く億兆心を一にして聖祖に同心し奉り堅實正大なる祖訓を體現する是なり此如くにして廣宣流布の裁斷を期待すべし此れ眞實の大國禱なり、然るに印度出現の釋迦佛の遺訓を奉體して異體同心の信行を企つるか如きは徒らに聖祖の本意に背くのみならず抑も亦た釋尊の正意にあらざるなり。

◎三世印判日蓮體具

こは何ぞや妙法本尊の中央に日蓮と御判形を加へ玉ふ深秘の妙判なり、曰はく首題も釋迦多寶も四菩薩も本化も二乘人天四衆八部天照八幡鬼畜獄悉く日蓮なりと

の給ふにあらずや、……產湯記に云はく久遠下種の南無妙法蓮華經とは日蓮なりと三身寶號則日蓮との給へる御義と一轍の妙判なり……又云はく諸天一同に唱へて云はく善哉善哉、善日童子、末法教主勝釋迦佛と三度唱へて作禮而去し給ふと

夫れ妙法曼陀羅や紙墨の本尊にあらずして則ち大聖人の御影なること明星池に於ける現證の如く下種の正境は人法体一なること豈に昭々ならずや、凡そ宗の內外を問はず種脫を混淆せる雜修雜行の徒は動もすれば兩卷血脈等を否認せんとす、あゝ其醜面を掩はんか爲に斯かる明鏡を破らむとするに至るは勢の免がれざる處、古今の靑僧迷僧皆然らざるはなし、此等の鼠輩は何れも人禍あらざれば則ち天刑あること古今皆然かり、佛天の明命豈に顧諟せざるべけんや。

◎歷代の嗣法悉く日蓮

吾が門下大曼陀羅の書寫は唯授一人、唯我與我の現貫首に限られたり、故に日蓮

在御判嗣法某と親寫せらる之れに就て最大深秘の御口傳あり、云はく代々の上人悉く日蓮と申す心なりと、あゝ誰れか身神悚慄、肅然として容を改ため至心に合掌せざる者あらむや、讀者乞ふ深省一番せよ思ふに歴代嗣法の教義殊に化儀事相の相違の如きは皆これ隨他機情の一邊を隨宜的に發表せし者にして眞實自行内證の一段に至りては亦た何ぞ本門宗あらむや日蓮正宗あらむや況んや尊門宗一名造佛宗の如きものあらむや呵々、法華經第二章に云はく衆に三毒ありと示し又た邪見の相を現はす、我が弟子かくの如く方便して衆生を度すここの意味に於て案ずるに如何な邪解迷想に陷る者と雖も皆これ權者なるなからむや如今衣を干仞の岡に振ひ、足を萬里の流れに濯ひ、天空海濶、鳥飛び魚の躍るに任せむ哉、是の如くにして旭日瞳々の宗門は建立せられ天空海濶の教法は弘まり清世澄心の道は興らむ嗚呼建元長久の術これを措いて又何か有らむや。

◎出尊形佛とは何ぞや

傳教大師の秘密莊嚴論に云はく、一念三千とは則ち自受用身なり、自受用身とは出尊形の佛なりと、高祖の御義に曰く出尊形佛とは無作の三身と云ふ事なりと、夫れ出尊形佛とは元初の本佛にして四八の妙相を具せる佛よりは今一段出過超絶し給ふ本地の尊容たる本法の覺體これなり、御義の御文板本一出字を脱せり挿入せざるべからず古人或は出尊をすいそんと訓し尊形の佛を出だすと譯せり誤なる哉是れ造佛宗の開山なり知らずんば有るべからず……御義に云はく本尊とは法華經の行者の一身の當體なり無作の三身とは末法法華經の行者なりと高祖大聖人の久遠元初の本佛にして本門の本尊の主體にて在ますこと仰て信ずべきなり。

◎鎌倉時代各宗共通の教義

とは何ぞや無作本有の四字これなり其れ〳〵教理の淺深はありと雖も無作のむきだし、……有の儘と云ふ信仰は共通にてありしものゝ如し、天台眞言の二宗然かり臨濟曹洞の二宗も本來の面目を提唱する處花紅柳綠を談ずる所皆是無作の義なり法然親鸞の二師が純他力主義を皷吹する處も亦然らずや、然り彼等の無作說

は我が大法流布の序分にてありき、高祖出現の前驅にてありしなり、眞の本地無作の教義本覺無作の法門は、最後に大聖人の唱導に待たざるべからず、御書御義に云はく、久遠とは働さず償はず本の儘と云事也所謂三十二相の佛に超へたる出尊形佛無作の三身の本時風光これなりとの聖語は寔に鎌倉期宗教の神隨たるのみならず一代聖教の精神なり、然り而して法孫達せず滔々として偶像的佛教の擊に傚はんとす、あゝ聖祖門下の振はざる固に故なきにあらず、後生何ぞ自覺の遲々たるや、現實我の外に理想我を求めず現實の苦我そのまゝに理想我の光明を認めしめむと教ゆるものは無作の大法なり、當體蓮華の佛とは日蓮が弟子檀那等父母所生の肉身これなりと說かれたり、煩惱を斷ぜざれ五慾を離れざれと說かれたる法華經主義は實に無作の極致にあらずや……。

時間や、空間や、因果に束縛せられたる苦の現實我その者に自由の光り理想の力を認識せしめて一大自覺を與へ完全なる人身觀を得て個人性の尊貴なることを信知せしむるもの是れ日蓮主義の最大要點にあらずや。

◎因緣感應の大事

御義に吾等行者の爲に因緣感應の大事を提唱して云はく、予が信徒たらむ人は衆生に此機あつて佛を感ずるが故に名けて因となす法華經の極理を弘めたるは機を承て應ずるが故に名けて緣と爲す、因とは下種なり緣とは三五の宿緣に歸るなり、事の一念三千とは日蓮が當身の大事なり（此文甚深の妙判なり）一と者一念大とは三千なり此三千を說きたるは事の因緣なり乃至使不斷絕は是なりと文、嗚呼高祖を外にして事一念三千を談ずるは日月を除て螢光を求め大地を離れて草木を尋ぬるが如し、末法吾等が因緣感應の大利益を失ふ大過を奈何せむ、智者大師の釋に合して感佛の二字を悟るべし感とは弟子檀那なり佛とは則ち蓮祖なり應字も又宗祖に當れり去れば吾人は聖祖を緣し奉り純一無雜打成一片に南無妙法蓮華經と唱へ奉る時、水晶の月に向つて水を取り孔雀の雷聲を聞きて姙むが如く本佛事行の御魂を感得すべし、此を末法下種要中の要行とも正中の正修とも云ふべし。

◎日本の大釋迦

あゝ印度佛蹟參拜者の言に聞けよ、佛蹟の今日に存するものは僅に無憂王時代の建築なる佛陀迦耶の靈塔あるのみこれ確かに玄奘記以前の者なりと云ふ、釋尊菩提樹下の成道以來悠々二千八百餘年、其遺敎唯だ大日本國に存在するも印度本國に佛敎なきこと殆んど二千年なりされば國破山河在、城頭草木深の感慨なき能はず、牧女乳糜を奉るの遺跡、六年苦行の聖跡も菩提樹附近にありと雖も徒に敗垣斷礎の魚鱗雜集せるのみにして、憐れむべし行路の人は麥秀の歌を謳はざるものなしと謠に言はく麥秀でゝ漸々たり、石佛累々として臥す此子津梁に疲れたるか噫、

夫れ天台大師の外用藥王菩薩なれども、其内證に至りては支那の小釋迦と稱するにあらずや、台家すでに判攝五品の相傳あり化本豈に判攝名字の相傳なからむや、天台既に震旦の小釋迦なり、聖祖豈に日本の大釋迦と尊奉せずして可ならむや、

壽量品の如來を蓮祖と定判し三大事を釋して其位を定め玉ふ時名字卽に六卽五十二位を攝せらるゝにあらずや、六卽配立の時は壽量品の如來は理卽の凡夫なり、頭に南無妙法蓮華經を頂き奉る時は名字卽なり、聞き奉り修行するは觀行卽なり、伏惑は相似卽なり、化他に出るは分眞卽なり、無作三身を究竟したるを究竟卽の佛とは云ふなり、十如是抄、勘文抄みな一轍なり、惣して伏惑を以て壽量品の極意とせず唯だ凡夫の當體本有のまゝを以て此品の極意と意得すべし、無作三身の所作は何物ぞと云ふとき南〇經なり、とは御義の明鏡なり極理究竟、深覺圓理の宗祖豈に下種の正本尊にあらずや、惣勘文鈔に云はく一代聖敎は一人の法なれば我身の本體を能く悟るべしと、悲しいかな不相傳の宗徒は人一の大法を悟らざるが故に多造塔寺の像法時代に逆轉して多造塔像濫造佛像てふ新らしき五百歲時を末法の始めに設けんとせり、是れ五五百歲にあらずして後誤百歲時と稱すべきか呵々、特留此經の文を附會して末法萬年以後の百歲と曲げたる淨土敎徒の罪に百千萬倍するものと云ふべし、堂々皷を鳴らして征討せざるべけむや、

あゝ三寶の御名を聞かざる冥想的脱迹宗徒よ、皇國の魂魄、世界の師父を以て任じ玉ふ高祖大聖尊を忘れたりや、それ我祖空前の大迫害に打勝ち當年事實上の主權者たる北條氏、それは虎よりも猛なる苛政を行ひたりしにも拘らず、終に白旗を立てしめさては人爵を與へ俸祿を献じ來るに至る、今や大成功を以て自ら居ると雖も誰れか之れを怪しむ者あらむや、然りと雖も日本の柱日本の眼目日本の大船てふ三德有緣の大恩教主日本の大釋迦……、其三大誓願たるや則ち世界統一の大理想なり、此鴻業成就の爲に出現せらるゝ大聖人僅の孤島の主たる政府者共に迎合するが如き固より其志にあらず、されば北條政府の妥協案たる一千町の阿堵物を冷眼に看過し、却て峻拒の鐵拳を與へ玉ふ、加之ならず門人の懇請大檀越の希望熱誠をも悉く斥けて一顧をも與へず、吁嗟々々敗者の如き御態度をもて雲山深き處に向つて遯れ玉ふ斯の大教訓、斯の大恩教、斯の大慈行、假令木石たりと雖も假令ひ禽獸たりと雖も驚かずんばあるべからず噫感激流涕して聲を放ちて泣かざるものあらむや、南無日本國の大聖釋迦牟尼如來……、

◎本因妙の教主と地涌の菩薩

は全然御一體なるか、經に云はく我本行菩薩道と是なり御義に云はく、本時地涌の菩薩は釋尊體具の菩薩なりと、其れ地涌の菩薩に本地あり垂迹あり、宗祖本佛論の信行觀は本時上行説より興れるか是れ新義にあらず最も深秘の古義なり宗の内外往々此説を以て日蓮正宗の二十六世日寛上人の創作なるかの如く稱せるは妄謬千萬と云ふべし、

◎主義を標榜せる要法寺

牛頭を懸けて馬肉を賣ること莫かれ、薄利多賣の看板を掲げて粗製濫造、暴利を貪ぼることを休めよ、看板は大小に係はらず僞りなきを以て貴しと爲す……、主義を標榜せるかな吾山本堂の法額、云はく玄宗極地、本時上行、扶桑惠日、長照闇浮、と日良上人の墨痕淋漓として其精神毅魄を表章せり、愚案するに上の二

句は文句より來り下の二句は八幡鈔より撰び給ふか、抑も亦た良師、自解佛乘の信智は這個十六字を感得せずんば止まざるなり、多造塔像派の諸師以て如何となすや、實に吾が山本堂は日蓮聖人の精神を發揮せるものにして、有緣無緣頭を垂れざるはなし、獨り怪しむ彼の渺たる新堂に至りては何等の主義標榜なし、是れ之を曖昧堂と云はんか、吾山信男信女一同に膽仰せざるものゝ如し、噫尊門流なゞゝ氣取れる者よ何ぞ聲を大にして叫ばざるや、予は背水の陣を布く迄もなし馬上優かに本時の風光を眺めつゝ悠然として一騎戰を試んと期待するものなり、近來髀肉の歎に堪へず篋裡の寶刀鳴て聲あり好敵手の出現を待たむのみ……。

◎惣體の地涌と別體の地涌

それ本果は悉く本因より來る、還て本果を借て本因を顯はすことあり之を從果向因と云ふか……、玄文第九に云はく諸迹悉く本より垂る、還て迹を借て本を顯はすと文迹中の釋尊を借りて本地の上行を顯はすが如し……、輔正記九に云はく經に四導師あり常樂我淨を表するなり、有時は一人に此四義を具すと、是れ地涌の大士に本地と垂迹の別ある所以なり之を惣體の地涌。別體の地涌と申奉るなり。惣體の地涌とは本時上行菩薩にして久遠本佛とは不二の妙體なり故に左京日教師（要山日辰上人より百年前の人）の如きは釋尊上行互爲主伴の說あり。三重本末大小主伴の法義あに徒に華嚴のみならむや、在世には釋尊は主なり本尊なり末法には高祖は主なり釋尊は伴也脇士也是れ在末互爲主伴の說なり今初心成佛抄を揭げて上行卽本佛の深旨を明さむ……。

◎初心成佛鈔の秘文

開すれば……久遠實成釋迦佛（上行無邊行淨行安立行等の四菩薩あり）合すれば……唯一の上行菩薩のみ餘佛悉く攝せらる

文に云く末法當時は久遠實成の釋迦牟尼佛本化四士等の弘め玉ふ七字計此國に弘まつて利生得益あるべし乃至上行菩薩の御利生盛んなるべき時なり道心堅固にし

て志あらむ人は悉しく之を尋ね聞くべきなりと。予れ弱冠にして妙種院を董す當時尊門本種講なる者あり。講員僅に貳十名何れも猛烈なる宗祖本佛論者なりしが。一日端なくも法論となりけるに少壯氣鋭の予は唯だ先進諸老の口吻を學んで四菩造立抄と此御書の文を引證して世智辯聰に任せて彼等を屈伏せしめし事ありき。今や此稿を起すに當り當年を追想して轉た慚焉たらざるを得ず、又今より廿二年前今の白蓮華の前身たる法王と云へる雜誌に二回計かり造佛讀誦主義の筆を投書せし事あり。今や此篇を草するに當りて悔熱灼くが如く慚汗背に浹きものあり噫……。

◎釋迦上行一體說

に就ては本尊抄。報恩抄。を以て斷疑生信すべきなり古來觀心本尊抄の本門教主釋尊を脇士と爲しての文に就て訓點の紛議あれども。彼の章の前後の文例を見るに分明に釋尊を以ての意なることを知るべし。

一、小乘の釋尊は迦葉阿難爲脇士

一、權大乘幷迹門の釋尊は文殊普賢爲脇士

一、地涌千界出現して本門教主釋尊爲脇士一閻浮提第一の本尊此國に出現す

右の文例を見よ若し本門釋尊の脇士と爲りてと讀まんか小乘の釋尊は迦葉阿難の脇士となり權大乘の釋尊は文殊普賢の脇士となりてと讀むべきか滑稽千萬と云ふべし。地涌若し釋尊の脇士となるならば此時地涌出現爲本門教主釋尊之脇士との文章ならざるべからず鎌倉期の似而非なる漢文體の流行期とは云へ餘りの拙調ならずや予れ未だ眞蹟に接せずと雖も强て此斷を爲す所以佛意に契はむが爲なり眞蹟假令の字の訓點を施し玉ふとも臨時の御失念か若くは對機的に暫らく枉げての字の訓點を用ひ玉ふや聖意測るべからざるなり身延山を身遠山と認玉ふことさへあり。又本尊抄の末文大公周公文王を攝扶しと判せらるるものの如き。文王の二字成王と訂正せざれば文理共に符合せざるが如き皆なこれ示同凡夫の爲體を示し玉ふか。大悲の至り崇敬の益々切なるものあらずや。

依て思ふ報恩抄は元初の本佛を本門教主釋尊と云ひ本尊抄には本因妙の教主を地涌千界この玉ひ靈山の釋尊を本門釋尊この玉ふか。同しく本門釋尊なれども本地地と垂迹の別あることを知らざるべからず。

報恩抄の御文能々拜見せよ碎身宗不空宗の徒と雖も聊か悟る所あるべし。文に云日本乃至世界一同本門の教主釋尊を以て本尊とすべし。所謂塔中の釋迦多寶以下の諸佛幷に四菩薩等は脇士となるべしと。此の本門釋尊を妙法五字と解し。大曼陀羅と會通するが如きは苦しき説明と云ふべし。夫れ三秘の中に人本尊の成立なくんば。本門の教主釋尊とは唯名のみありて其實なし。所持の本法のみにして能持の人なくんば徒法徒善の死佛教と云ふべし。天台云法は可軌なりと雖も體自から弘まらず。之を通ずる人に在りとは是なり。諸家大抵釋尊てふ名字に欺かれたるが如し。在世の迹佛を本門の教主と有るが故に本尊問答抄には行者の正意にあらずと釋迦多寶を撰捨し報恩抄には本門の釋尊を本尊とすべしと攝取せらる彼等不相傳の徒は釋尊と云ふ名字同ふして義の異なれるを覺らざるが故に聖判の矛盾せるかの如く考へ祖意測り難たしなどと稱して解釋を施さゞるは不相傳の悲しさにあらずや諸家諸鈔の中に日健抄は第一の卓見なり健師報恩鈔の本門釋尊を判して云はく此の本門は通途の本門にはあらず本化と云ふ事なりと此は頗る沈思默考の結果やゝ本時本佛の曙光を認めたるものゝ如し其暗に蓮祖を指して本門釋尊とするものゝ如し然れども之を明言すれば富士門流と笑はれもせずやなどの凡情に驅られて下種本尊の妙相蓋し斯の如しと斷案せざりし日健師心事の不健康亦た諒すべからずや。例せば吾が門下にも今更宗祖本佛論を唱へては富士五山に屈伏せりと笑はれもせずやなどの私心愚心を狹めるもの往々之あるが如し。高祖云はく年來餘りに法に過ぎて謗りしかば心にはさもやと思へども翻へす由をせずこれ念佛眞言禪律等の諸高僧の心事を讀破し玉ふ聖判なれども今や脫迹諸師が魔心に對する清涼劑となるなからむや……。

無量義に云はく文字は一なりと雖も其義は各々異れりと。然かり本門の言も釋尊の名も重々の配立ありて一準ならず。若し夫れ泛く本門と云はゞ因に通し果に通

心種に亘り脱に亘る一同の純圓とは是なり。報恩抄の本門教主とは則ち本因妙の教主釋尊にして凡夫骨肉色心本有と談する釋尊なり。彼の迹中色相の佛は人法別なり、これ化他隨情の外用應迹にして諸佛所師所謂法也の經文又は法は此れ聖の師也とこの釋これなり

◎何ぞ以日蓮爲本尊の聖訓なきや

本化の四士則ち本因妙の釋尊にして久遠元初の報身は人法體一。境智冥合。内證眞身の實佛にして其當位を末法蓮祖の御身に移すとならば宗祖何ぞ直ちに日蓮を以て本尊とすべしと明言し玉はざるや。云はくこれ何ぞ愚問なるや明者は其理を貴み闇者は其文を守るとは是なり。昔者子貢孔子に問ふ夫子は聖者かと。孔子云はく聖は則ち吾れ之を知らず。吾れ學んで厭はず教へて倦まざるのみと子貢言下に領會して云はく學んで厭はざるは智なり。教へて倦まざるは仁なり、仁にして且つ智あらば夫子は既に聖人なりと。而して孔子終に之を尤めず其聖を以て居るや明なり。後世孔子を大聖と云ふ誰れか之を否定するものあらむや。怪しむべし大聖日蓮の徒日蓮本佛論に對して恰かも寇讐の如し孔門の子弟其師を尊信すること斯の如くそれ篤つし。蓮祖の弟子と稱するもの何ぞ蓮祖を信ずることの淺きやあ、。既に此抄は舊師道善阿闍梨の追福の爲に開眼し玉へり。何ぞ露骨に妙判あらむや。外典の聖賢猶自から其聖たり賢たることを顯はすことを憚かれり。況や出世の大聖をや。且つ時機尚早の故に暫らく釋尊の名を借りて其尊貴無上なることを顯はし玉ふ。然りと雖も此等數通の御書によりて釋尊日蓮名異體同の義彷彿推尋すべきならずや。開目抄。報恩抄。を主として其三德有錄を明かし給ふこと内外の聖判枚擧すべからざるものあり。皆これ以日蓮可爲本尊の梵音と云ふべし。盲者は日月を見ず聾者は雷聲だも聞かず。これ止むことを得ざるなり噫、……或は上行再誕と云ひ或は久遠の本佛と唱へ。或は一體の異名と云ふ吾門の教義信仰には。或る時期までは何人も惑はざるを得ず然りと雖もその、

◎信眼映徹する時

は容易に之を信解することを得へきなり。文句九云はく父は還年の藥を服すれば貌ち廿五に同じ。子は藥を服せざれば形百歳の如しと宗祖云はく地涌の菩薩は獨り覺めたりと其れ服藥せる釋尊と一向藥餌を假らざる上行菩薩其本迹明了ならずや……天台云はく如來は横に垂迹の藥を服し伽耶の始生を示す諸菩薩は直に本地を論ず久しく道心を發して今不退に住せり若し佛と佛とは快よく此事を知る而下は達せざれば疑はざるを得ずと文本因の釋迦本時の上行一體の明據か彼の天台宗一時の明星として玄妙能化の尊號を縱まゝにせし日什正師如何に此の妙釋を領解せしや徹根徹底せりや否や末學の徒迷亂なきや否や、妙樂記九に本文を細釋して入神の妙に至る者あり更らに引證して本化の增上緣に啓沃する所あらしめん云はく、子は藥を服せずと言は且らく劣應の身を現ぜさるに據る。尚ほ勝を以て本を表す故に百歳と云ふ既に若佛及佛と云ふ彌勒の不知を顯はす中略不二の身を現す

故に本地と云ふと以勝表本、現不二身、の二句八字これ門下の明鑑と云ふべし。味識せよ神會せよあゝ信眼映徹の時。快知此事の時。

◎百川の海に潮するが如し

末法の化導。地涌千界を除き奉りて之を求めむか、三佛の本意を失ひ靈山付屬の大事も徒施なるべし。凡そ經釋に本化稱歎の文甚だ多しと雖。其の所詮は末法出現の高祖御一人に關すること瞭々として火を見るが如し。道暹云はく法は是れ久成の法なるが故に久成の人に付すと。久成とは久遠實成のことにあらずや。經釋制止の碎身形像を緣して事一念三千を語ることも。殆んど戯論に近からずや。其れ猶ほ墻に面して宮室を望むが如きか。

妙樂云はく結緣は生の如く成熟は養の如し生養緣異ならば父子成せずと御義に云く父とは日蓮なり子とは日蓮が弟子檀那なり世界とは日本國なり益とは受持成佛なり。法とは上行所傳の題目なりと、緣に牽かれて應生すること百川の海に潮宗

するが如くなるべし。本化御一人の御利生なること時々刻々念々に忘るべからざるものか手に卷を執らざれども常に是れ讀經、口に言聲なけれども遍く衆典を誦し、佛說法せざれども恒に梵音を聞く、心に思惟せざれども普く法界を照らすこは是れ亦た打成一片聖祖の魂を感得するものの謂ひか。あゝ斯の國斯の法斯の人を忘れて彼の國彼の法彼の人を親しむことを休めよ悖德悖禮不忠不孝、非國民、非眞佛子にあらざるなきか。

◎理證論よりは現證論

に若くものはなし吾が敬愛する前修及後進諸君。諸師は日大記の全部を信奉せりや。又辰師造讀論を信行せりや。眷師法令の遵守者なるや。造佛施設時代の勤行式其他の化儀を順奉せりや否やと反詰せむか。誰れかよく大聲疾呼、然り矣と答ふる者ぞ。噫その中心忸怩たらざるを得むや。吾人は謹み再拜して茲に大なる聲明を爲すべし。讀者よ須らく齒牙の餘論を惜むこと莫かれ……。

抑も吾が尊門流は嗣法卅代日良上人以來。事實に於て何人も宗祖中心論なり、高祖本佛論者なりと斷言せざるを得ず。何を以て此の空前の斷案をなすや。晴天の霹靂とは是なり。試みに思へ諸君が現在の三業供養はすべて聖祖に捧げずや。其視聽言動は皆これ良師法令の踏襲にあらずんば全然服從にあらずして何ぞや……然り而して造讀主義を以て尊門の眞義なるかの如く唱へむとす。是れ雜毒主義なるなからむや。羊頭を掛けて豚肉を販がむとする者にあらずや。況んや大多數なる宗祖本佛論の先師を目して石山亞流とか我寛兩師の餘粕を承くる者と誹議しその最も甚たしき毒舌に至りては宗學上の反賊とさへ筆にして江湖に照介するに至るをや如何に陽氣の精とは云ひかゝる妖僧どもの醱酵するに、至りては先聖先師も血涙を催ふし玉ふなるべし嗚呼々々諸君が自から欺き他を欺き而して天下後世を欺かむとするもの亦た偉ならずや。之を序正流通三段具足の圓瞞法門と云ふべきか呵々……。甚だ强言に似たれども造讀主義が先輩某々等の其主張の全體にして之を以て聖祖大聖の生命なるかの如く皷吹するか如きあらむか。之を割くに

何ぞ何ぞ牛刀を用ゐんや。あゝ九原の下も喚起せむかな英雄未死の芳魂！

◎造佛論の代表者

蓮成院化主は良住立勝の四師を詰責して云はく。引題目は要山の舊式なり。經に云はく唱導之師と、補註に云く唱とは引唱なり、導と者啓發なりと盖し引題目の淵源なるか然るに今や本尊寶前日將曰現今の本堂なりに於て此舊式を廢し唯だ天拜の時にのみ引唱を用ゐは甚だ不當なり云云（日將云く四十四代海師迄は天拜を行はせ云ふ末寺は今猶之を行ふ現今吾山何ぞ之を廢するや）

日將云はく良師法令以前は吾山も富士五山等と同しく五座三座の勤行式にて唱題はすべて引唱を用ひたるか。其數五遍なることも舊記に據りて明白なり。現今何ぞ違背するや何故に宗學上の反賊たる良師の御法令を遵奉して造佛の先師日眷師などの法令に從はざるや不忠不孝の造讀論者なるかな……。

化主云はく事の一念三千の御本尊は下種結緣の正境なり。然るに宮殿の中に覆藏して逆緣の見聞結緣を遮斷すること是れ亦た不當の一段なりと……日將云く勝師の時未だ新堂なし化主若し現存すれば。現今の造佛堂卽ち二尊四士二明王等に對しても此論鋒にて閉帳主義を喝破せむか。此時に於て造佛論者の自界叛逆起らむとす奇觀々々。

化主云はく近來本堂の勤行唯だ一座に限り數座の讀經を禁ぜり。恰かも謗法禁斷よりも甚だしきか如し。是れ全く要山の舊式に異するのみならず。興門一流の法式に背ける新規なり……。日將云はく造佛と讀誦は古來より比翼の鳥の如く連理の枝の如きものあるが膠漆の離れざるが如し。

化主云はく近來佛前の立華を樒に限り。餘の色花を献ずることを禁じ、又茶湯を供ふることを禁ぜり。甚だ謂はれなき事なりと……日將云はく造佛主義者よ黃金佛の前に甘茶を備へ梅櫻桃李乃至蓮華草千日紅等を捧げざるべからず又例の堪否問題の提出が情けなきかな汝の主張……。

化主云はく大凡供物は女色と肉とを除く其餘の供物は之を許すこと聖敎の通規なり今や何ぞ餘供を禁ずるや……。

日將云はく除女色與肉と、は中々振つた警句と謂ふべし。深く翫味すべき反詰なり。近代の造佛主義者は近女色與肉の結果慘たる末路の一幕を演ぜしものなきか噫

化主云く本末共に歴代の位牌及び開山の肖像。檀越の位牌等を廢捨せり是れ何事ぞや。不知恩の誹り免かれ難し況や忌日命日等に靈供を供へざること三十七個條違背の過免かれ難きかと……。

日將云はく化主乞ふ惑ふこと勿れ。本尊壇は神聖なるを要す既に二尊等の佛像だも禁ぜり況んや位牌をや。不須復安舍利の禁戒に從ふものなり。聖像造立餘佛不造の現はれなり。然りと雖も開山堂の建立には造不兩系共同一致の行動たるべきか。御大典紀念として新堂を開山堂と改むべし。而して僧俗一致護法の聖業に從はんか快哉々々。

化主云はく實錄に題目は心法妙の直體なり之を迹妙本妙觀心妙と名付けたり云云文の如んば題目則ち觀心妙なり然るに別して觀心の題目と名けて唱題修行の後にて數返長々と節を付けて唱ふること是れ近來の風儀なりすべて一宗内此例なし甚だ異風なり勸請回向の後にて唯だ一返南無妙法蓮華經と唱へて足るべき事なり……

日將云はく化主の如くにして眞の主義あるものと云ふべし後世の造佛論者の如きは主義あるが如く定見なきが如し少しく古賢の風采を想望して其氣象を學ぶべきなり。化主の此の難詰は洵に肯綮に中れりと云ふべし。下根の吾等は數百返の唱題ありて然る後ち無意義なる觀心の題目てふものを十返位も繰かへされては眞に溜つたものにあらざるなり。造佛の諸師何ぞかゝる美點を發揮せずして所謂富士流の良師法令に服從せるは地下の蓮成院の罪人にあらずや如今須らく外儀内心に違はざることを勉めよ。

化主云はく百六箇に云はく本門寺は本堂、上行院は祖師堂と文。興師重須の棟札に云はく本堂。鎭守堂祖師堂と、然るに今時本堂に於て祖師の像を安置せり。祖師堂に於ては何等の祖師を安置せむとするや但し祖師に於て本堂の祖師祖師堂の祖師と兩樣あるや是れ甚だ不當の一段なり、……日將云はく辰師學黨式に依れば當時は本堂客殿鎭守堂寶藏の外に十羅刹堂なるものありし事明白なり永祿規約よ

り十六山同盟なれば亦た自然の數なるべし。造讀主義を復古主義と稱するものよ深く反省せざるべけむやあゝ幼稚なる美的假像論を振舞はすことは善い加減にして貰ひ度きものなり……。

◎良師御法令評論の評論

御法令に云く、末寺に於ては本山三堂の中に祖師堂を移すべしと……化主曰く本山三堂とは何ぞや本堂、客殿寶藏を云ふか客殿は開山堂とも云ふべし。法藏に於ては既に土藏なり何ぞ佛堂と云はむやと。又末寺なれば全く本山諸堂の式を移すべし何ぞ祖師堂に限らむや本末の相違は如何

評に云はく本山の本尊あり、末寺の本尊あり。本山の修行信念は末寺のそれと異なれり天下豈に斯の如き宗團あらむや、これ吾門の獨歩、尊門の光榮か。

御法令に云く、修學の時に於ては一部眞訓兩讀麁略あるべからずと……蓮成院云はく修學には一部讀誦を許して勤行には之を禁ずと。内外の祖判與目尊等何れの文證あるや。中古以前本末共に一部讀誦をなすこと明白なり。何ぞ祖判に背き舊式に違ふやと。

評に云く亦た以て吾山中古以前の化儀なるものは。所謂る雙用本迹、但令用實。なること略ぼ推知すべし。去れば予が本篇第一章に於て造不兩系の嗣法ありと雖も互に默識心通にして一點靈犀の通ずる者ありて四聖一貫の大法理に於ては曾て何等の毀損なしと云ふもの是れ誠に尊門義の光顯にして金甌無缺の血脈にあらずや。

御法令に云く寺役檀用等すべて素絹五條を着用せよと。化主云はく凡そ三衣は佛者の通服なり、何ぞ五條に限りて七條九條等を禁ずるやと。

評に云く造佛論者の主將蓮成院日奉師が抗議辯難の書を假りて却て不造論に資せむとする吾人は所謂る糧を敵國に資るの兵法か。敵者の武器を奪つて還て敵を誅せむとす是れ聲を以て聲を止むる者なり。願くば敬愛する諸師と共に吾門既往の悲風慘雨を一掃して風雨順時。日月晴明の天地に遊ばんか。今

や。千載一遇の佳會にあらずや。機を見るは其れ神か……象も虎も不造造も括目して化主が疑難を見よ。誰れか中古以前の非なることを悟らざる者あらむや。御法令以前の吾山は七條九條等の攝受衣を着けて攝受行をなせしや明かなり。造讀主義者も今や思ひ半ばに過ぐる者なからむや。

御法令に云く、本尊式に就ては中古以前は隨宜の一邊なりと……。化主難じて云く最第一の本尊を何ぞ隨宜の一邊と云ふや。不審多端なり況や中興辰師造佛讀誦論を作て強て造立本意の旨を述ぶ。況んや觀心本尊抄の明文照々了々たるをやと……。

評に云はく吾山新堂の略本尊なるものは全然一致式なること明瞭なり。先輩諸師が四聖三賢の本意を了せず強造形像の苦說を付して今日に至る迄で無意義の禮拜雜行を繼續し來りしこと慚愧清淨を祈らずして可ならむや……。本隆寺日東師は寛政年間十五山中の猛者にして要山迫害の急先鋒たり。彼れが吾山よりの質問に回答せしと云ふ十疑辯を見るに吾山現今の新堂法式は一法二尊四士四天二明王にして全然單稱式の雜物堂たること斷々乎として疑なし然而して吾山の造讀宗徒は猶自覺せざるか吁。又移るべからざるなり。嗟又及ぶべからざるなり。中興辰師にして論者の言の如く強て造讀を勸進したりとせば師は未だ五綱教判の大旨をも四重の興廢をも辯せざる羊啞の僧と謂ふべし彼れに何等の血脈相承あらむや負贔の引倒しと云ふは是なり。焉んぞ辰師内鑑の邊に於て造佛主義などあらむや宣べなるかな雲間の蛟龍時に其金鱗の一二片を顯はせる者なからんや内鑑冷然外適時宜とは是なり……。

御法令に云く、佛法は五五の數を以て轉ずと……化主云はく五五の數を以て本尊を轉ぜんか今後五百年の後は何等の本尊何等の佛法を弘通すべきや乃至末法萬年は如何。

評に云く百年一命世、五百年一賢人、千年一聖人とは東西古今の歷史を見るに聖賢英豪の人間に生まるゝ天の曆數とも云ふべし何ぞ獨り五箇五百歲を疑はんや。其れ末法は盡未來際。萬々斯年。大聖日蓮唯我一人の御利生なること

こを知らずや速に爾ぢが朦朧たる頭腦を洗錬し來れあゝ此の子愍れむべし毒の爲に中られたり……。

御法令に云く大集經に云く云云と脱佛の聖教尚ほ此の如し況や末法下種佛の聖教をやと文……化主云く此況勢反倒せり祖書を以て經文を況するは可なり。經文を以て祖書を況すること豈に反倒にあらずや況んや祖書は聖教にあらざるなり如何。

評に云く造佛主義者の造詣は古往今來此の如きもの鮮からず淺識謗法とは是なり。笑ふに堪へたり況勢反倒の一矢、天を仰いで唾ずるが如し抱腹絶倒すべきなり、御妙判のことを聖教とこの玉ひしは門祖日興上人を以て嚆矢となすこと吾門三尺の童も能く之を知れり、今蓮成院師は化主として之を忘れたるや是れ唯事にあらず藥發悶亂の然らしむる所か噫……、

知らずや下種を以て末法の詮と爲す……餘經も法華經も詮なし唯だ南經なるべし……今此壽量品も在世の脱益にして末法の要法にあらずとは高祖の勅敎にあらずや然らば則ち祖書を以て經文を況すること其淵源は宗祖に在らずや既に云はく如來滅後五百歳始觀心本尊抄と、賢承君何の恨事ありて恩師日良に對して此の如き愚難を奉り延いて吾門の相承を破らむとするや殆んど獅虫に庶幾からずや。

大凡聖祖の遺訓を聖教と稱するに何の憚りか之あらむや、御經の外は聖教にあらずと思へる君等一流の徒の猶往々あるが如し、亦た宗門の禍なる哉、宜しく撰時抄御義口傳に通曉せよ。吾祖の遺訓は之を久遠の本經と尊奉する可なり、之を大日本固有の法華經と尊稱する亦た可ならずや之を要するに古今の造佛熱中論者よ今少しく識見を助長せさるべからず而今而後頭の改造と同時に腹の充實せんことを祈らさるべけんや盖しこれ當務の急なるものか……。

御法令に云はく予が時に當りて大法廣布の發軫と文……化主云はく發軫とは初の義なり、若し然らば四聖は未だ大法發軫せられず、五百年後に始めて三大秘法顯はれたるや、報恩取要三大秘法鈔等は、宗祖の虚説なるか如何、

評に云はく其れ然り豈に夫れ然らんや、……大聖滅後五百年間は吾山の歴史前陳の如きものあり而して御法令發布以來三秘の隨一たる本門本尊の威靈は京洛の地に體現せられたり皆是れ先師が身讀法華の賜なり、中にも守眞院日住上人は寛政法亂の際三度の高名あり允に一代の教豪其師を辱しめずと云ふべし、當時の史蹟を尋ぬる者頑夫も廉に懦夫も志を立てさるはなし、古人云ふ櫻井祕別の史傳を讀んで泣かさるものは孝子にあらず出師の表を讀んで泣かさるものは忠臣にあらずと吾人は云ふ良住立の三師生海二師等捨身決定、大法恢弘の跡を見て感泣せさるものは亦た吾門の孝子と忠臣にあらず

と……、

嗚呼吾が眞守院日住上人も亦た時に當りて靈的日本帝國の柱石と謂つべし春風秋雨、一百十有八年、赫々として尙ほ前日の事の如しかゝる大法器を薫陶せし人は誰ぞや中興辰師以後唯一人の大法主、要山嗣法三十代日良上人是なり、辰師は第一の中興にして良師は第二の中興と稱すること誰れか異義あらむや予が祖父の句に……室梅や、そだてし人を、賞めにけり、と云へり此師にして此弟子ありと云ふべし

果然良師御法令の最終に於て予が時に當りて大法廣布發軫せりとの玉ふこと豈に自贊ならんや、蓋し身心遍歡喜の發露と云ふべし（中古已後良師はこれ正中の正師と云べし）

法華取要抄に云はく末法の中には日蓮を以て正か中の正と爲す曰はく、自讃は如何、曰く喜び身に餘まるが故に堪へ難くして自贊するなりと文 !!

南無妙法蓮華經　南無本門本尊日蓮大聖人

維時大正四年三月十八日

大僧都　安良日將拜稿

大正四年五月八日印刷
大年四年五月十三日發行

非賣品

京都市三條川東法皇寺町四百四十七番地
著作兼發行者　安良日將

京都市八坂南通上町參百六拾八番地
印刷者　梶山正次郎

京都市東山通三條上ル東門前町五百卅壹番地
製本者　山本友吉

京都市柳馬場通三條南入槌屋町四、五、六番戸
印刷所　似玉堂活版部

終